



南園會報

會報部



第叁號

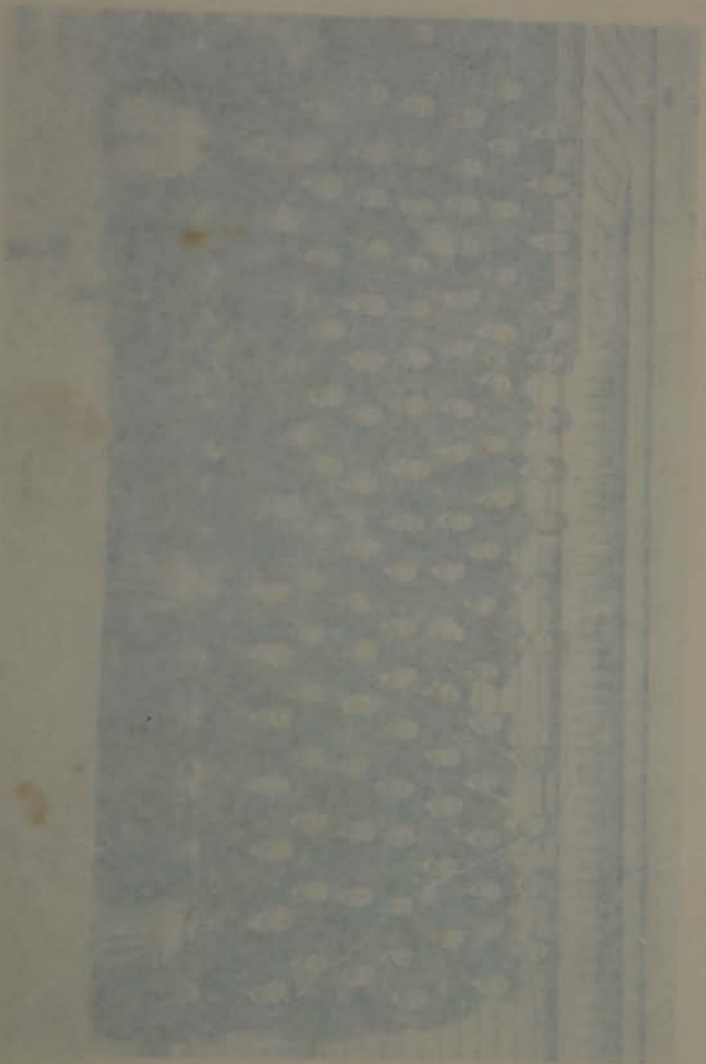
清常

清常



筆御樣院松貞 贈寄爵男利毛

貞松院様は、御名を八重子と申し、毛利家第十三代の主たりし齊熙公の御女なり。文政三年三月江戸にて生れ、長じて徳山なる毛利元蕃公の御室として嫁がれしが、後故ありて歸家せられ、それよりは南園御殿に住まはれて清く春秋を送り居られしが、明治三十三年三月御年八十一歳にて逝去せられたり。御墳墓は大照院にあり。



貞松院様は、御名を八重子と申し、毛利重宗十三次郎重  
たし新田公の御女なり。文政三年三月江戸にて生れ、  
其とて徳山なる毛利元重公の御室として嫁りしが、  
故ありて歸家せられ、それより其御室御殿に居りしが、  
其く事状を定り懸られしが、其御室は三年三月御室八重  
一様にて居合せられたり。御室は八重院にあり。



大正四年三月二十二日第三回卒業生

山口縣阿武郡立  
實科高等女學校

# 南園會報

## 第參號目次

### ● 口 繪

- 貞松院様御筆
- 第參回卒業生

### ● 教 の 園

○ 現代婦人の警戒すべき方面……(1)……米原會長

### ● 學 の 園

- 國語假名遣……………(3)……特別會員…中野貞介
- 盆裁……………(7)……特別會員…本永 旭
- 帶の仕立方に就いて……………(10)……特別會員…藤野カチ
- 按摩術に就いて……………(12)……特別會員…世良ハツ
- 書道に就いて……………(14)……特別會員…田中タカヨ
- 普通禮法……………(16)……特別會員…中野スエ
- 裁縫に就いて……………(18)……特別會員…齋藤タカ

### ● 文 の 園

生徒作文……………

……………(二十一題) 自3020

● 歸雁のたより……………

……………(五題) 自3831

● 本校の一年史……………

- 一、椿八幡宮神苑の參觀……………(39)
- 二、香川津二孝子の百年祭……………(40)
- 三、河原先生の退任……………(41)
- 四、先生の就任……………(42)
- 五、郡内小學校長の來觀……………(43)
- 六、郡會議員の來觀……………(43)
- 七、補習科生徒の小學校參觀……………(44)
- 八、第參回保證人會の開催……………(45)

山中幸子	三好嘉子	渡邊保子	村田チヨ	伊藤ミサ子	藤原トキ	菅原先生
田村操	松原ツル	光田コト	岩竹ハナエ	鈴木静子	中野先生	
大田ヨシ	安田ヨシ	朝方京	藤原マズ	堀江ミドリ	田中先生	
石井千代子	河北山子	濱部ハナ	矢島愛子	阿武文子	世良先生	
中原トヲ	川永ふく子	松原チヨ	黒瀬キミ	宮原七サ	藤野先生	
山本幸子	君谷喜代子	田中フミ	厚東ササ	野村フシ	安藤先生	
倉増千代子	長谷チヨ	金子シズ	阿部チヨ	和田秀子	前田先生	
古橋喜代	河野ミツ	松井文子	榎原マサ	平木ハナ	米原校長	
檀見彌代	村田スエ	大森チヨ	歌枝アキコ	山田ヨシ	三浦チネ	
長嶺芳子	寺田クリ	中村スミ	山本松江	岡村タチ子	藤村マツ	
三村クリ	能美キクコ	岡武カメ	倉田算子	島屋原孝子	河村鶴子	中野先生
大賀政	三村キク	河野千世	内藤ヨシ	吉賀トシ	竹重ツヨ	坂口先生
山下サト	伊藤トサ	岡部タケヨ	米原ハツメ	赤上ツヨ	金子トミ	木本先生
重枝アキ	三上千枝	松岡シブ	村上ミナ	栗屋雪子	村木秀子	右内先生
吉田義美	松野花子	金子清	國重静子	河田シズ	村木秀子	中野校長
西田ヨシ	山本ウメヨ	佐伯千代子	三浦ヨシ	林浩子	椿 嘉子	
長井アキ	田中ツルコ	岡原上サダコ	國弘トメ			河村書記
小野文子						

教の園

現代婦人の警戒すべき方面

大正四年八月二十九日  
第二回同窓會席上講演

米原會長

現代婦人が、女性美の如くに觀じ居るものは、無暗に新らしがること、街ふこと、高襟風こと、虚榮に憧れること等にして、實に心ある人々として、覺醒せしめつゝあることは、掩ふべからざる事實であらう、それが事理を辨へぬ輩ばかりだとすれば論外だが、間には随分高等の教育も受けたる人にして、此の種の人物がある、否却つて斯様の方面の人に、それが多きを認めるのは、妙な風潮といはねばならぬ、或る先輩が指摘せし如く、現代的の傾向として、險難な不健全な空氣が今瀰漫して居るではあるまいか、即ち個人主義的傾向、物質主義的傾向、懷疑主義的傾向、現實主義的傾向、破壊主義的傾向などがそれである、その總てが自己中心の言動、靈能を忘れたる虚榮の言動、萬事に疑を抱く不信の言動、永遠と忘却せる利那的享樂の言動、危險的破壊的の言動など、即ちそれ、是に於て淑徳なるべき善の女子が奇妙の者となりたる、即ち女子にして女子らしからず、娘にして娘らしからず、要にして要らしからざる、一種奇怪の變り者を往々世上に見るが如きは、國家の

九、卒業記念園の設置……………(45)

一〇、第參回卒業證書授與式の舉行……………(46)

一一、本學年の開始……………(47)

二、教科の増加……………(48)

一三、縣下高等女學校長會議の開催……………(49)

一四、本年の身體検査……………(50)

一五、越ヶ濱の遠足……………(51)

一六、毛利公爵の臨校……………(52)

一七、本年の養蠶と稻作……………(54)

一八、學の築の設定……………(55)

一九、探本堀切兩監察官の視察……………(55)

二〇、知事郡長の更迭……………(56)

二一、眞鍋中將の來觀……………(57)

二二、御大典記念事業の計畫……………(58)

二三、我が校運……………(59)

●本會の一年史

一、第壹回同窓會の開催……………(60)

二、名譽會員と顧問……………(61)

三、年末の茶話會……………(61)

四、卒業生修了生の送別會……………(62)

五、學藝會の開催……………(62)

六、總會の開催……………(63)

七、前年度經費の決算と役員改選……………(63)

八、第貳回同窓會の開催……………(65)

九、我が會運……………(66)

●會告……………(66)

●會員名簿

以上

爲め別けて家族制度の上に立つ我が邦家庭の上より見て、實に慨嘆すべきことである。

此の間に立ちて、我が學校が學規に於て特記せる如く、常に慎重の態度を以て、嗜欲の節制に努め、漫に世の流行を追ひ又は其風潮に動かされざること、といへる旗幟根據の下に、婦徳の高調に力め、特に躬行實踐、誠實、勤勞、感恩、敬愛、節操、和平等の如き又所謂婦徳、婦言、婦容、婦功の四行の如き、着實にして穩健なる修徳を激勵する所以、眞に此の微衷に外ならぬ、而して吾人は現代婦人の風潮を見て、強ちに悲觀慷慨するものではない、過渡時代の現象として、當今の如き情況の現出も、蓋し免れ得ぬことであらう、さりながら眞の女性美は、現代的弊風に浸染せる婦人の云爲し居る様のものではない、正直、謙讓、温順、同情、義理、廉耻の如きものでなければならぬ、是は何れの時代を通じても、變るべきものではない、世の東西時の古今をも貫くべきものである、予輩は中庸の所謂「詩曰衣錦尚綈、惡其文之著」也、故君子道闇然而章、小人之道灼然而日亡。」といへる明文を玩味し、眞の品性完備の良婦人を望んで已まぬ。

あゝ平安朝や、元祿時代といへば、世人は其時代の弊風を容易に指摘し、且つ當時の人々の知らず識らず陥りし缺點をも嘲笑するであらう、然れども現代的弊風の中に立ちて、其間に呼吸し居る吾人そのものは、その弊風に感染し居ることすら、覺知せざること決して尠くない、反省し熟考し觀察せざるべからざる點は此處にある、是を以て吾人は現代に生活しつゝ、而かも現代の弊風を看破し、卓然たる理想を描き確然たる主義を抱き、之を觀之に據り、達せざれば已まぬといふ、崇高熱烈なる生命ある精進向上を以て進まねばならぬ、再言す温和謙讓の中に淑徳の、徹底せる堅固なる底力のある與懐かしき、眞の働さる良女子、即ち徹頭徹尾穩健なる良婦人の輩出は、今も亦將來も、家國の上より見て、最も焦眉の急務たるを感ぜざるを得ない、我が校が家庭の上に國家の上に眞實の意味に於て、貢獻し得ると否らざるは一に係つて此の點に存する。

# 學の園

## 國語假名遣

特別會員 中野貞介

國語假名遣に就きては、いろ／＼談話したこともありました。其の時何かに摺りものにして配布しようかとも、たゞ／＼思つたのでありましたが、此の度第三號の南園會報が出来ることになつたのを幸、此の誌上で述べることにいたします。さて近頃の文章を見ますと、發音のまゝを記したのもありますが、それは極めて稀で、大體は普通りの假名遣の慣例に従つて居ります。即ち歴史的假名遣によつて居ります。今こゝに述べるのは、無論此の歴史的假名遣の方であります。我が國の極昔は、假名遣が異なる如く、其の發音にも判然たる區別がありました。本居宣長の古事記傳の總論にも、天曆(村上天皇)の頃より以前は、發音のまゝを假名に表したから、其の時代以前の書物の假名は、皆正しいといはれて居ります。所が語音はだん／＼

變遷して行くのに、假名ばかりは普通りでありますので、遂に今日の如く特に假名遣につき注意する必要があるやうになりました。今發音同じくして、假名の用法の異なるものを挙げますと、次の通りであります。  
わ、は「い、ぬ、ひ」 う、ふ「え、ゑ、へ」  
か、を、は「じ、ぢ」 す、づ

此等の假名遣の異同を知らうとするには、其の紛れ易き語の數甚だ多くありまして、記憶することが容易でありませぬ。それで昔より其の簡便法として、紛れ易い語の中語數の少ない方を記憶し、多い方をそれ以外であると推知するであります。例へば「い」の假名の語は、二百五十位もありませんが、「ぬ」の假名は悉く集めた所で、極僅であります。尙假名遣につき注意すべきは、語の原の意味を考へて工夫すること、例へば「はらわた」腸は腹綿であるから、綿一字の時は「わた」と書くから、上に腹がついてもやはり「わた」で、即ち「はらわた」と書き、「居」は「ゐ」であるから、敷居・鴨居・鳥居皆したは「ゐ」と書く。又「路」は「みち」で「み」を省くと「ち」であるから、こうぢ・なみぢ・いへぢと書き、「かみかさ」髪搔を「かうがい」と書く。そのやうに、語の原の意味を考へれば、皆推知することが出来るのであります。こゝに便宜上送



假名の假名遣と其の他の假名遣とに分類して、語数の少い方を記し、終りに假名遣の歌を掲げます。

送假名の假名遣

○す、わ、ひ

「す」と書く送假名

動詞ヤ行上二段活用 老<sup>し</sup>・悔<sup>い</sup>・報<sup>い</sup>（酬<sup>い</sup>）

「音便」…（動 詞例開いて開きて）仰いで（仰ぎて）

「わ」と書く送假名

動詞ワ行上一段活用 率<sup>あ</sup>る・用<sup>あ</sup>る

此の外の「い」と發音する送假名は「ひ」

○う、ふ

「う」と書く送假名

動詞ワ行下二段活用 植<sup>う</sup>・据<sup>う</sup>・餓<sup>う</sup>（飢<sup>う</sup>）

「音便」…（動 詞例食うて（食ひて）言うて（言ひて）

此の外の「う」と發音する送假名は「ふ」

○え、ゑ、へ

「え」と書く送假名

動詞ヤ行下二段活用 見<sup>え</sup>・見<sup>え</sup>・聞<sup>え</sup>・燃<sup>え</sup>・覺<sup>え</sup>

え・消<sup>え</sup>・越<sup>え</sup>・肥<sup>え</sup>・癒<sup>え</sup>・榮<sup>え</sup>・聳<sup>え</sup>・絶<sup>え</sup>・生<sup>え</sup>

冷<sup>え</sup>・殖<sup>え</sup>・吼<sup>え</sup>・洩<sup>え</sup>・凍<sup>え</sup>・甘<sup>え</sup>・思<sup>え</sup>・魔<sup>え</sup>

「す」と書く假名（「音便なるが多い」）

かい糧かうがい筈さいはい幸たいまつ松明やいと  
灸やいは又ふいと鞠ついたら湖ついで築地ついは  
む啄あさい朝寝おいかげ縋さいづち小槌はいと隼  
人はいたか鶴たいたい燈

「わ」と書く假名

る居くらむ位もどむ基ある藍くれなる紅あぢさゝ  
紫陽花うなる髪髪かたる乞食くわる慈姑なる地震  
る猪ぬのしし猪の蘭むしる蘭庭ぬもり蝶蠟ぬな  
か田舎むさり膝行むさらひ臂むや禮まるる参るる  
り爐るる率

此の外は一語の上にては「す」、中と下とに於ては「ひ」の假名

○う、ふ

「う」と書く假名（「音便なるが多い」）

まうで詣まうす申かうへ首かうむる被たたらうがみ  
蠟紙てうづ手水まらうと寶はうき帯かうもり蝙蝠  
つかうまつる事ルかうばし香やうか八日まうけ設  
はうむる葬やうやく漸せうと兄人あさうと商人か  
うがい筈かうへ神戸ひうが日向

此の外は概ね「ふ」の假名

○わ、を、へ

饑<sup>ゑ</sup>・潰<sup>ゑ</sup>・表<sup>ゑ</sup>・映<sup>ゑ</sup>・萌<sup>ゑ</sup>

「ゑ」と書く送假名

動詞ワ行下二段活用 植<sup>ゑ</sup>・餓<sup>ゑ</sup>（飢<sup>ゑ</sup>）・据<sup>ゑ</sup>

此の外の「わ」と發音する送假名は「へ」

○す、づ

「す」と書く送假名

動詞ヤ行下二段活用（濁音）交<sup>す</sup>

動詞ヤ行變格活用（濁音）論<sup>す</sup>・混<sup>す</sup>（他は之に準ず）

副詞……………必ず

此の外の「ず」と發音する送假名は「づ」

以上の外の送假名の、假名遣は、其の活用を誦ん  
じて見れば、分り易いものばかりであります。

送假名以外の假名遣

○わ、は

「わ」と書く假名

あわ泡ひわ鞠しわ敏くつわ轡かわく乾すわる坐こ  
どわざ諺よわし弱さわく願わわつ周章いわし歸く  
るわ廓ことわり理たわやか輝妍たわむ撓のわき野  
分はらわた腸くわい慈姑こわね聲音さわやか爽た  
わやめ手弱女いわけなし幼弱たわら儀

此の外は「は」の假名

○い、ゐ、ひ

「わ」と書く假名

いりい入江さのい甲（ひのい・みづのい以下準之）  
さざい蝶螺しづい下枝ながい蟻ぬい鶴はい籠ひい  
稗ひこばい葉ふい笛のいふい咽喉ゆふばい夕映も  
いぎ萌黄さゝい小筒

「ゑ」と書く假名

ゑ繪ゑかく描ゑ餌ゑばし鳥帽子ゑふ醉ゑる彫ゑぐ  
る刻ゑづく吐ゑた穢多ゑむ笑ゑがほ笑顔ゑんじゆ  
槐ゑぐし蒸ゑる聲ちゑ智恵すゑ据すゑ末ゆゑ故つ  
くゑ机どもゑ巴つゑ杖いしづゑ礎

此の外は一語の上にては「わ」、中と下とに於ては「へ」の假名

○お、を、は

「を」と書く假名

を雄を学を尾を緒を小をけ桶をどと男をんな女を  
ち伯父（叔父）をば伯母（叔母）をか岡をかし可笑を  
かす犯（侵冒）をかむ拜をさ箴をさむ修（治政）とさ  
く多クハをさなし幼をさ萩をこたる意をこる者  
をしへ教をち遠をとり媒鳥をせる踊（跳躍）をの斧  
をのく戦慄をり折をを瀬をこせ膝をし驚驚との  
へ岑をみなへし女郎花をしむ惜をる居をひ甥をは  
る終をど、ひ一昨日をさ長をり檻をめく呻をつと

夫をとり少女をこ鳥評をろち蛇さを竿みさを操み  
を水脈いさを功とを十あを青ばせを芭蕉うを魚し  
をり栞しをる葵しをん紫苑やをら徐々をす申た  
をやか嬋妍みをつくし深標こをばい紅梅めをど夫  
歸わざをぎ併優

此の外は一語の上にては「お」、中と下とに於ては  
「は」の假名

○「は」に紛るゝふ

あふぎ扇あふぐ仰あふみ葵あふち樽あふり障泥あ  
ふみ近江たふる倒たふとし貴(尊)あふし啞さのふ  
昨日けふ今日

○じ、ぢ

「ぢ」と書く假名

うち氏なんぢ汝なめぐち蛸輪くちら鯨あぢ味(鱒)  
すぢ筋ひぢ臂かぢ棍ねぢ鋏もみぢ紅葉ふぢ藤こぢ  
ぢ街みそぢ三十路をぢ伯父(叔父)をぢ翁をぢぢ祖  
父かぢ鍛冶かぢ舵わらぢ鞋わぢぢ紫いへぢ家路  
(波路等)

此の外は「じ」の假名

○づ、ぢ

「ず」と書く假名(上の假名「す」なるときは「ず」の假  
名)

す不すいり雀すいり鱈たゝすひすいり涼すいり  
漫すいり硯すいりふ準ねすみ鼠もす百舌鳥みゝす  
蛭刺くす葛すいり鈴すいり錫すいり疵かす數はす管あ  
す杏こすす相いしすす礎はすみ機すいりな慈すい  
る蘿蔔

此の外は「づ」の假名

○ゐの歌

假名遣の歌(種々あれど句調佳なる歌を掲ぐ)

ゐど(井戸)ゐもり(蟲名)ゐなか(田舎)ゐひしろ(蘭麩)

ゐる(居)ゐのこ(猪子)

ゐざり(膝行)トかたゐを食(率)ヂヤまゐらひ(參)

ゐる(藍)くわゐ(慈姑)もどゐ(基)ニうなゐ(髮髮)

くらゐ(位)ある

花ハあぢさゐ(紫陽花)草ハくれない(紅)

○いの歌

かい種(=くい)悔あゐ(老トひくい)報ハいろはの「い」  
其の外すべて「ひ」の假名を書く

○うの歌

植う飢うト握うの三字の外はみな  
「ふ」の假名を書く詞なりけり

○えの歌

ゑへ(醉)ハゑひ(笑)ゑんす(槐)ノこぞゑ(稻)

○わの歌

をかす(犯)をさまる(治)どを(十)ニたをやか(嬋妍)

しわ(皺)たわら(僕)かわく(乾)あわつる(周章)

さわやか(爽)よわし(弱)いわし(鱒)ことわり(理)

ひわ(鞆)くつわ(轡)くわゐ(慈姑)たわむ(撓)の外は皆  
「は」文字の假名を書くこと知るべし

○ぢの歌

うち(氏)なんぢ(汝)かうぢ(小路)なりくじ(蟲名)  
くぢら(鯨)あぢ(味)

○すの歌

すぢ(筋)ひぢ(臂)かぢ(棍)ニねぢ(寝)もみぢ(紅葉)まぢ(麻)

すい(鈴)すいり(雀)もす(百舌鳥)かす(數)ねすみ(鼠)

すいり(硯)すいしく(涼)すいさ(鱈)なすらふ(筆)

此等の歌は主なるものゝみを詠み入れたるものである  
から、洩れたるは前に記したるを参照せよ。

盆 栽

特別會員 本 永 旭

(一)盆栽とは何か 近時園藝趣味の發達に伴ひ盆栽趣

もどす(末)つく(机)どもる(巴)うつし(繪)

系(餌)ニう(風)つう(植)木ヲ植ゑつ鉢す(据)つ

ゑ(し)慈(杖)ゆゑ(故)こゑ(聲)ニすゑ(陶物)

○わの歌

ふ(笛)さ(小筒)ぬ(鱒)は(鮎)さ(螺)その外は  
ゆの字に變はる見ゆ消ゆの類

○その歌

をこ(鳥評)をかし(可笑)をぞる(踊)そのゝ(戰)

をひ(甥)をがひ(拜)

をち(伯父)をば(伯母)をこ(男)をんな(女)をこめ(少女子)

をど(一昨日)のうを(魚)を(助詞)ヤをし(惜)

をり(檻)ノ川を(瀬)をめ(呻)をる(居)なり

をか(岡)をのへ(岑上)をぎ(荻)をぐるま(小車)

をば(尾花)をし(鴛鴦)をち(遠)ノ舟を(長)

をせ(竿)を(功)み(箒)を(箒)をの(斧)

をし(葉)をし(葵)をし(教)まを(申)

をけ(桶)をが(学殿)をは(終)玉を(緒)

をさなく(幼)も

味を愛する人も非常に多くなつて来た、これ盆栽の趣味は高尚優雅にして其の術も廣く且つ深きが故に各階級通して普及する所以であらう。さてこの盆栽とは讀んで字の如く鉢に植られた植物の凡てを指すのであるが眞に盆栽と稱すべきものと鉢植といふが至當なものがあることを知らねばならぬ、盆栽とは其の盆裡に栽られた樹木なり草花なりが唯單に花を開き實を結ぶといふばかりではなく一層深く人工的技術によつて立派なる藝術的要素を備へ人の審美眼を訴へるのである。例へばこゝに一本の松があるとして其の丈は僅かに一尺か一尺五寸ばかりであるが根の張り工合から幹の姿勢枝の出方が宛も自然の太木のやうで熟視してゐる中に參差天を摩する様に見ゆ梢を離れて風に漂ふ斷雲の影も眼に浮んで来る、龜甲形に膚が裂けて古色を帯びた幹には注連繩が張られて由緒ある神木の姿とも見ゆる。松の根元には苔むした鳥居や祠の形まで髮髻として眼前に迫り、殆んど其の境に臨むが如き心地もする。又夫れが雜木の寄植でもあつたら春は若々しい發芽の姿が青春の血潮漲る表彰とも見られよう。夏は綠葉の參差として繁り合ふに對しては一種の幽趣忽ち胸に湧いて限りなき詩的情緒を感せしむるであらう。秋は木の葉既に色附いて野面の微風に揺られ片々枝を離

れて人生の眞趣悉く現はれ恰も無心に郊外の林の中にも彷徨ふ心地がするであらう。冬季落葉既に地に委しては、枯木空林亦一種の寂寥を感せしむるものがある。又更に霜枯れた秋草の小盆栽でもあつたら、八重葎茂り重なる野邊の姿小草の葉裏に啣く蟲葉末に宿る夕の露、或は落葉の下往く水の音まで、耳に響くの思ひあらしめるのである。斯くの如く自然の景觀を掌大の盆裡に寫す所が、藝術として盆栽の價値ある所以で、其の暗々裡に想像し得る意味印象の深き程餘韻含蓄の多き程盆栽として價値の大なるものとする。

(二)盆栽の種類及名稱 盆栽はその形によつて、種々の名稱を附せられるもので、今その重なるものについて簡單に説明すれば。

一、直幹 樹身の直立せるものをいふので、宜しきを得れば小木も尙亭々として天を摩するの概を有せしめる。

二、双樹 一に相生とも呼ばれるもので、其の一は以て他の足らざるを補ひ、よつて好趣を加へる。

三、株立ち 又武者立ちともいはるゝもので、一株より多數の幹を發生し、四方に開きて生長させる。

四、根上り 數根地上に高く露出せるものをいふ。

五、寄植 多數の直幹のものを一つの鉢に込むたもので、樹木は全種樹數は必ず奇數にしなければならぬ。

六、懸崖 文字の如く斷崖絶壁から自然に降下した姿勢で、此の種の仕立方に適するものは葉の細かさも花の小さきもの或は蔓性のものなどである。

七、半懸崖 直幹と懸崖の中間に位し、樹木横生の状態を模したるものである。

八、石附 巖石上に生じたるものに模するので、盤根固く石を抱擁せなければならぬ。

三盆栽の培養土 盆栽培養上に重要な關係を有するものは之を植込むべき土であるが、凡ての樹木草花は種類によりて生育に適する土質を異にするから、一々肥すことは出来ぬが、左に培養土の原料となる重要なもの一二三を挙げる。

一、赤土 赤色で粘氣のあるものどないものがある。

二、畑土 普通の畑土で粘氣も肥料も少ない。

三、河砂 排水を良くする爲に必要で、水の清い深川より採つた白色のものを最良とする。鹽分を含むものは決して用ひられぬから久しく雨にさらすがよ。

四、腐葉土 落葉や草など腐熟して土になつたものだから黒色として居る。肥料も多く含んでゐるし吸

水保水の方も強い。

五、腐植土 下水溝の泥のやうにいろいろのものの中に腐つて肥料分が非常に多い。

右の原料は樹木草花の種類によつて適當の篩にかけ適量宛調和して用ふるか、或は肥料分を多く含ましむるため雨のかわらぬ所に置き人糞尿や魚肥油粕を混して培養土を作るものもある。

(四)盆栽の肥料 凡そ植物が生育するには水及日光空氣の必要なことは勿論、肥料として窒素燐酸加里の三成分を與へなければならぬ、殊に小盆中に特殊的生活をしてゐる盆栽には、其の施用に大なる技術を要するのである。肥料としては油粕鯨粕鰯の煮汁大豆の煮汁蠶糞過燐酸などで樹によつて用法も違ふが、右の内油粕は最も一般的に用ひられてゐる。これを水肥とするには粉末一合に水一鉢五合の割合でよく溶解せしめ二三週間程で稀薄にして施す。總べて肥料はよく腐敗したものの程軟和で取扱が容易である。又植物に於ては生活の状態によつて肥料を要する時期があり、吾人が觀賞の目的によつても三要素の分量と施肥の方法とを考慮せねばならぬ。

五盆栽の灌水 小盆中に生活してゐるのだから灌水の必要は言ふまでもない。水は流れ過ぎ河水を最良と

すれども、何種の水たるを論せず一應汲み置きて暖きものを用ふべきである。灌水する時期は夏は夕刻日没後をよしとし、冬は朝十時頃をよらしとす。

六盆栽の保護 盆栽は天然の生活に反する生育をなさせしむるものであるから、之れが保護には手厚き注意を要するので、細枝一葉の微でも忽にすることが出来ぬ。

- 一、置き場所 空気の流通日光の透射良好なることは勿論、陳列の方法等にも工夫を要する。
- 二、夏季の保護 植物の生育と気温とは密接な關係を有するものであるから、灌水に注意すると共に炎熱を避けしむる設備を要する。
- 三、冬期の保護 枝梢根部の凍死を防ぐにあるので、其の堪寒力に應じ相當の保護を要する。殊に晩霜の際効芽を損傷せしむることが多い。
- 四、害虫 種類が多く驅除の方法も色々であるが、普通に驅除剤としては除蟲菊粉石鹼水又は石油乳剤が用ひられる。盆中に蟻が巢を營みて困ることが多い。これを驅除するには先づ樹木の幹の根元に毛髪を巻きつけ水盥に入れ鉢の上縁五六分迄水を達せしめて凡る十五分間に取出し二三日乾燥して稀薄な水肥を施す。

帶の仕立方に就いて

特別會員 藤野 かね

以上記したことは至つて簡單で、唯重要な項目を列挙したに過ぎぬ感がある。尙ほ苗の仕立方正形の方法移植法など極めて主要なこともあるが、紙面に限りがあるので他日稿を改めて愚見が述べたいと思ふ。本稿に於ては唯盆栽とは如何なるものかといふことが判明すればそれで本望である。

すべて帶を仕上ますには、まづその準備として、帶の整理が何よりも大切だと存じます。

普通帶地には、両耳のつれたものが、餘程多うございますから、是非ともこの耳伸ばしが第一必要で、それには、つれた程度によりまして、所々に切込を入れるか、或は單に鋸だけですましますか、兎に角布の中程通りよりも、縫目の方が少し伸び過ぎる位まで、充分伸ばして置きます。次には折目や、皺などをよく檢べて、これも丁寧に直して置きます。右の様にして布の整理がすみましてから、始めて仕立方に取りますので置きます。

男帶。丸帶は二つ折りに、腹合帶は二枚合せて假綴

を致しますが、この際最も苦心致しますのは、地質の異つた腹合帶でございませう。例へば縞子か博多の類と、縮緬などを打合せ場合などがそれで、こんな時には、すべて地質の薄い伸び易い品を、上に載せて置きます。そして最初縮緬の伸び方をよく檢べて、丈、幅どもにそれだけ張り目にして、漿をかけるので置きます。(地質の薄い品になりますと、縫目に二三分幅の紙をあて、縫ふことも其の方法でございませう。)なほこの際布の取扱に就きまして、最も注意を要しますのは、絞りの帶側でございませうが、これはなるべく絞りを伸ばさぬ様に、又形を崩さぬ様に取扱つて、その上一度締めましても、縫目や幅などが、亂れぬ様に仕立てることが肝要でございませう。それには色々方法もございませうが、絞りを適宜に伸ばして、そのあたりの裏一面に、真綿を引き伸ばしてあてて、其色の割糸で、極々小針に綴ちつけて置く法が、割に簡便で宜しいかと存じます。又鹿の子絞りとか、地薄の縞などになりますと、薄い糊無し金巾で、裏打ちを致すこともございませう。この場合にも、矢張り裏打ち布を、稍々弛めにあててお忘れはなませぬ。

假綴ちがすみましたならば、次には丈・幅の標を附けまして、地厚の品は半返しに縫つて割綴をかけます

し、普通の品は一針抜か挿針にして、折は片返しにして、角をよく整へて置きます。(角は縦横とも一寸五分程、手前から五厘位縫出します。尤も男帶には、衞仕立と縫仕立とがございませうが、何れも両端は半返しに縫つて、心を充分に引合はして、角をよく整へて置くことが必要でございませう。)

次は心拵へでございませうが、まづ心地の耳を真直に裁ち落して、二枚心の時は、一枚は帶側の縫代の折込はどひいて裁ち切つて、真綿を両面にひいて置きます。極上仕立になりますと、心を二枚ともに、帶側の縫代だけひいて裁ち落して、心と縫代の端とを、つき合せにする方法もございませうが、これは仕立の大變奇麗なだけ、多少の熟練を要しませう。

心が出来ましたならば、心を稍々弛めに帶側の上に乗せて、(一尺につき凡を一分より一分五厘位、しかし兩端一尺の間は弛めないうで置きます。綴ちつけて表に返して、心を充分に引合せて仕上を致します。十分に壓を置いて、男帶ならば、十に疊んで三ヶ所を封じ、女帶ならば、長さに應じて七か八に疊んで飾糸をかけて置きます。

以上で帶の仕立方、殊に腹合帶に就いての事柄は、大畧申述べました積りでございませうが、つまりその要

所は、最初の布の整理と、心の弛み加減と、角を巧みに整へるとの三点にあるのでございませぬ。それで帯地の種類や地質によりまして、以上の事柄を参酌して、右の三点に注意致しましたならば、手際よき出来栄を見る事が、出来ようと思ひます。

### 按摩術に就いて

特別會員 世良 ハ ッ

近來按摩の術は、非常に進歩致しまして、學理的及び實際的に、中々委しく研究されて居ります。臨床醫家にも、治療上按摩に依らざれば、治することの出来ない者もあると申されて居ります。

從來の日本按摩は、殆んど、賤業者の致す事と、限られておりました事とて、此の道を學ばんとするものは、餘り御座りませんでした。彼が鳩翁道話中の、中澤道二先生の理論の通り、如何に良家の子女でありましても、嫁したる時、大切なる舅姑に仕へ、且つ一家の平和を保つ上にも、決して缺くことの出来ない修養だと思ひます。我が本學校長も、子たるもの、是非とも心得置くべき、必須なる稽古だと申されて、私をして専門家に就かしめられ、此の道を皆様に傳へ致す。

すことになりました。

扱按摩には、我國に行はれつゝ、ありませぬ所の在來のもの、西洋按摩(マッサージュ)とがありませぬ。我が國のものは全身按摩で、血液の循環を催し、筋肉の疲倦を調和するに止まる衛生的の按摩で御座りまして、西洋按摩は、主に疾患諸般の症状に應用致し、發熱したる痼疾をも、救ふことを得る治療的按摩で御座りませぬ。此の按摩の仕方は何方でも大した相違はありませぬが、唯日本では衣服の上より致しまして、何時にても、身體の中樞即ち心臓に近き所より初め、漸々下の方へ按摩を行います。西洋按摩は、皮膚に直接に、心臓に遠き所即ち下の方より漸々上に進んで致します。此の所には何方にも行ひまする仕方を述べることに致します。併し衣服の上からも行ひ得る法ではありませぬが、成るべく皮膚に直接が宜しいので、衣服の上からでは充分に作用することが出来ませぬ。

#### 一、輕擦法

此の法は血液の環流を能く致す効能があります。一指或は數指の尖端、又は手掌、拇指球、小指球にて、或は輕く或は重く、適當に壓力を加へて、心臓に遠き方より心臓に向つて擦るのであります。其

局部の廣狭によつて右に申した各種の施し方が違ひます。例へば掌骨及び蹠骨の如き狭き所は、一指の尖端、脊部其他廣き場所は、手掌を以てし最も壓力を加ふる所は、拇指球にて致す様なものであります。此輕擦法は按摩の終始には、必ず致さねばなりません。

#### 二、強擦法

此の法は示指、又は拇指を用ひ、手腕の關節は強直の状態に保ちて、肘の關節を僅に動かし、主に肩の關節によりて手を運ぶ如くに致し、指を鉛直に局部に加へ皮膚に密接せしめ、鋸を使ふが如く、又は小圓を畫きつゝ、心臓に遠き所より心臓に向つて行ひませぬ。此の法は皮下の出血、漏液、滲出液等の自然にまかして、治癒し難き際大に効果あるといふことではありません。

#### 三、揉捏法又は捻轉法

本法は血管淋巴管等の内容の循環を催すばかりでなく、筋組織内の滯液を搾り出す所の効があります。方法は左の通り數種あります。

- イ、四指と拇指との間に筋肉を壓搾しながら下部より上部に進むもの即ち四肢に用ひます。
- ロ、両手の手掌とに挟み恰も錐をもむ如くにし

て揉捏するものは上肢に用ひます。

ハ、拇指揉捏、拇指腹面を輪狀に捻轉するもので脊柱の兩側肩胛骨の側を揉捏する時に使ひます。

ニ、手掌揉捏、手掌面を密接に局部に當て輪狀に捻轉するもので、脊部の廣き所又は腹部腰部に用ひます。

ホ、拇指側揉捏及び小指側揉捏、拇指側面及び小指側を局部に當て、左右に揉捏するもので、横に揉む時は何れの部分に用ひても宜しいのであります。

#### 四、叩打法

叩打法は局部に充血を起して其營養を高め、筋肉に對しては電氣の作用をなし興奮性を與へますから、筋肉の萎縮等に用ひて効果があります。此の法は之を行ふに、輕快にするやうにして、決して強力を用ひてはなりません。技術に左の數種あります。

イ、手背叩打法、指と腕關節等は成る丈動かすことなきやうに、主に肩の關節を動かし、手背を以て靜かに打撃するのであります。此の法は何れの部に用ひても宜しいのであります。

ロ、手掌叩打法、卵一個を握り居る心地に、手を輕く握り、小指側を以て輕快に彈力的に打つ法

でありませす。此れも各部に用ゐられます。  
ハ、手頭叩打法、頭部顔面部等に行ふものでありませす。其動作は、恰も指頭を以て物をかきあつむるが如く、主に拇指、示指、中指の三指を使用致します。

五、振頭法

是れは按摩の技術中、最も至難の法であります故、此の法を致します機械が出来て居りませす。冬期寒冷に遭ひませすと、知らず知らず手の振ふことがありませす。此の動作こそ本法の模範とすべきものでありませす。此の法を致しますには、指手を強直状態にし、肘の關節を直角になし、肩の關節も餘り動かぬ様に於て、指尖を局部に接して振はすのであります。又腹部背部の如き、廣き場所には手掌を以て致します。

以上の方法にて、何れの部にも初め輕擦法を行ひ次に揉捏法叩打法をなし輕擦法にて終るのであります。強擦法振擡法は疾患の時必要に應じて致すのであります。

凡て按摩術は、術者は被術者をして、最も快感を覺へしめることを得る様に技術を熟練し、常に解剖生理の素養を持ちませして、家庭に應用致し、晚餐後一家團

形體を整へる事を習ひ、第三には手本に似せる様に努める。第四には筆勢を加へ、第五には自己の意見を立てると云ふ様に於て、其習ひ得たる文字は、如何なる場合にも用ゐ、又筆意を類似文字に應用するとしたらば、随つて進歩が早い譯である。斯く言はば、物事に燥急る人は、迂遠なる沙汰たどするであらうが、決して然うでない。一時に澤山熟さうとするから、失敗して成功を見る事が難いのである。多く學んで得る處なきより、少しく習つて得る處ある方、遙かに勝る譯だと信ず。尙參考の爲めに、王羲之百日の稽古とて、傳へられたる方法を左に記す。

一日見る。二日習ふ。三日問ふ。四日了解す。五日寫す。六日病を見る。七日手本を捨つ。八日本根を見る。九日行住座臥を思ふ。十日神を得る。

以上の如く繰り返して百日間修行したとの事である。その他見暗とは、見て書くこと、見ずに書くことをいつたので、是亦習方の一法である。古へ一字一見習ひ様といはれ、先づ手本に就て一兩度習ひたる後に於て、一點を見て書かば、一點を暗に書き、一畫を見て書かば、一畫を見ずに書く、偏を見て書かば、旁を暗に書くこと云ふ様に於て、順次に覺へ、見較べて字形あり、點畫なりが、見て書いた字に劣らぬ様に工夫しつゝ習

樂の中に、長上老人を喜ばせることができませすれば、一家の幸福此上もないことで御座います。

書道に就いて

特別會員 田中タカミ

書道に就いて、何か話せとの事で御座います。至つて口不調法で、何さへ御話する様な研究談も持ちませす。且つ此道に關して論ずるといふ事は、誠に恐れ入る次第ですが、是非にこのことですから、つまらぬ事を、御話いたします。

書道に就て申せども、範圍が廣つて、何を御話したらよいか一寸困りますので、先づ習方について私の日頃思つて居る事を、申事に致します。

惡筆をなげき、之が練習の必要を感ずると同時に、文字を練習して見たい心になる。すると大抵の人は、習字するにあつて、最初から文字の形體なり、筆勢なりの全部を得やうとする傾きがある。斯く一時に全部を盡さんとするの慾望を以てするは、却つて進歩の捷徑でないから、順序を立て、習ふ事が大切である。然れば如何にせば、可あるかといふに、第一には文字の頭足(又首尾)の部分に正確に書く様にし、第二には

ふのである。此方法は、經驗上最も有益なることを信ずるのである。

是亦心得て置かなくてはならぬ事である。

- 一母養 手習するに、充分なる工技を凝らすこと。
  - 二任本 手本に能く似る様に習ふべきこと。
  - 三各體 一點一畫を離して見ても、夫々體を具へ姿を有する事である。
  - 四神力 筆の神(肉の筆使) 字の神(骨の筆使) 心の神(皮の筆使)
  - 五風情 點畫の風情、長短大小の風情、備はりて筆つかひに窮屈なき様の體なること。
  - 六儀形 點畫及文字全体に威儀を備ふべき事である。
  - 七無病 筆の病、點畫の病、字の病なき様にかく。
  - 八超格 手本よりも筆勢の猛く思はるゝ様にかく。
  - 九墨付 墨の紙にたれもひつく事であつて、潤澤にして枯瘦せず、ひら／＼と立ち上る煙の雲に連るが如く見ゆる様あるべき事である。
  - 十顯品 文字の幽玄にして、筆情神妙に見ゆ、自ら品位の顯はるゝ様に書くべき事である。
- 以上申せました様にひとりお習字のみに限らず、凡へ

て技能に属する學科は、それ／＼人々により長短は御座いますけれども、非常なる天才の人をのぞく他は、俗に云ふ「ならふよりなれよ」と申す様に、之が進歩を望むには、右申ました様な主義で以つて、熱心に根氣よく練習することが何より大事だと、私は信じます。そして、習ふにも、種々なる御流儀を交へずに、或る種のものを選び、一貫することが必要かと思ひます。

### 普通禮法

特別會員 中野 ス エ

#### 禮の必要

禮は自己の思想感情を發表する最善最良の形式であります。苟も自分の思想感情を最もよく發表し、又最もよく他に了解せようとするには、禮の形式によらなければなりません。爲すことを他よりは、悪く誤解されたり、又は物笑ひの種にされたりすることは、澤山あるのでございませぬ。ですから、苟も社會の人となつて、社會の人と交際し、互に其の思想感情を交換しようとかもふには是非とも禮を知らなければならぬことは謂ふまでもありますまい。

之は謂ふまでもありますまい。凡そ交際する程の人は、努めて其の意志感情の疏通を謀り、その人の品性を尊び、敬意を以て他に接すると謂ふのが、禮の本意でございます。右の通りにして居たならばどうして他と衝突が生じませう。他との衝突は、大抵の場合には、双方又は何れかの一方に、無禮の行動あつた場合に起ることが多いのでございます。それで相互の禮讓を擴めては、國と國との交際も亦圓滑に行はるべきものでございます。

#### 人の家を訪問する時の心得

人の家に参りました時は、先づ戸口から聲をかけます。取次の者が出ました時は、勝手口の近き方へ後を向け、斜に向き一禮して、後、用事を述べるのであります。取次の者彼方へ通れどありませすれば履物を勝手口の近き側に揃へまして亂雑にならぬ様脱ぐのであります。履物を亂すは、常に締りなき人と見られることがあります。座敷へ通れどありませれば控目にして、次の間あらば其れに、若し次の間なき時は座敷の入口、出入の邪魔にならぬ脇の方によつて居るのであります。主人出で此方へあるとき、貴人なれば次の間に

一禮し、同盟ならば少し下座に、下輩ならば上座で挨拶いたします。

#### 取次に出でたる時の心得

取次は訪問者の聲を聞きつけた時は、たゞへ食事中でありませしても、速に玄關に出ます。此際前掛をつけて居りますれば直に取去るのであります。そして玄關又は上り口に出まして、主人と同輩らしきか又は目上らしき人ならば兩手をつき、後を勝手口の方にし、目下らしき人にては、片手は必ずつきて口上を聴き、初めての人ならば入口に待たせ知人ならば時宜により直に玄關又は座敷に通すこともありませぬ。入口に待たせ置く時は勝手へ入り主人へ言ひ傳へその指圖に隨ひ通します。夜間なれば手燭又は洋燈を持ちいで、客人を席へ通したる時は明りを其席に置く。夏なれば團扇、夏座蒲團草蓆、火鉢は九月節句より三月末頃まで、寒暖に従ひ見計つて出すがよいと思ひます。茶菓子等はそれ／＼注意して出します。

#### 座蒲團の出し方

座蒲團を客に進む時は下座の手には中央を持ち、我が脇に下けて持ち、上座の手は座蒲團の上、我が前の角に添へ出で、客の前に跪き、程よき處の下座の方

に出します。折れ易きものなれば二つに折り、右手にて持つて出で、跪きて下に置き、挨拶をいたして下座の方より進めます。若し貴人でありませれば左掌に載せ、右手を縁に添へて乳の邊にして持出で、貴人の後へ廻り跪きまして、一旦下に置き、取り直して進めます。すべて立歸る時は兩手を突き、右の手と膝とを跡へ引き爪立て、手を膝の上に取り、右へ少し捻りて立ち歸ります。注意せねばならぬことは、座蒲團なる時は縮目と人の横にし、小紋の座蒲團にても少し長みあらば、長き方を左右にして進める方がよろしいと思ひます。

#### 同受け方

他家に行き座蒲團を進められました時、貴人の前なれば用ひぬ方がよろしうございます。けれどもこの頃は随分用ゐる人が多くなりましたから、再三進められました時は、先づ左右の膝を引き、爪立ちまして膝を上げ、座蒲團を引き寄せて膝の下になし、兩手を突き左右の膝を下し、前に出で膝を三寸位出して敷くのであります。大きな座蒲團なる時にても後へ餘し、自身を卑下して座するものであります。歸る時は二つに折るか、又折れがたき時には下座の方の後に成るべく引寄せて、置きます。何氣なく膝前の座蒲團が澤山出で

居るのを見る時は、誇りをあらはす様ですから注意せねばなるまいと思ひます。

珈琲湯の出し方

珈琲茶碗を臺に載せて其の持手を客の右になし、匙を茶碗の向に、左手にて取り易き様向けて置き、臺を左掌に載せ右手にて臺と茶碗とを確と持つて出で、客の前に跪き程よき處にすゝめるのであります。コーヒー茶碗の取手を客の左に、匙を右に、なるやう持出る事もあります。

同受け方

受けやうは先づ兩手で取り、左の手にて匙を持ち茶碗の中へ入れ二三回させて匙は仰向けて臺の上に置き、左の手にて臺を持ち右の手にて茶碗のつまみを持ち、呑み終りて臺に据へ下に置きます。多人數の時は双方を見計ひ、程よき時呑みます。匙を右に茶碗のつまみが左にある時は、右手にて臺を持ち左手を添へたいさ、我が正面に置き、我が左の手にて茶碗のつまみを持ち、右手にて匙を持ちよく中をまでて匙をば茶碗の中に入れ、両手にて口の邊まで持上げ、右の手にて匙を持ち左の手にてつまみを持ち、匙にすくひ三四回呑みて、匙は臺に仰向けて置き、右手を添へて呑み終

第二に手早く短時間で出来上らねばなりません。其の他、經濟上、衛生上、裝飾上にも叶つてゐなければなりません。今一つの、形を美しく、着心地よく縫ひ上げるといふ事も缺いではならない一つだと存じます。そこで、私はこの形を美しく縫ふといふ事に就きまして、貧しい経験の中から一二の御話を申し上げることに致しました。

イ 當節は、皆様が着物の衿を抜いて御召しになるやうでございしますが、これは、衿をつけます時、衿肩廻りで身頃を繰るのでございします。その仕方は、背縫の縫込を五六分位にして衿肩明の半分あたりまで真直に縫ひ、其所から衿肩明の切目に向けて繰つて縫ふのであります。衿のゆるみは、両方の衿肩明の間で三分五厘見て置けば宜しうございします。あとは普通小袖と全様に衿附けを致します。これ位の衿繰りの小袖の上に重ねます羽織は、別に衿肩廻りを繰りませんでも差支へございませぬ。

ロ 衿を抜いて着物を着ますと、帯をしめます時、後の袖附がつかえますので、小襦袢も、小袖も、羽織も、總べて前袖附より後袖附の方を五分程少く致しますと、大さう工合がよくなります。

ハ 小袖も長襦袢も、後身幅の割合に、前身幅を廣く

らば、右の手にて匙を取り、茶碗を下に置き、右手の匙をよせて置くのであります。

裁縫よついで

特別會員 齋藤 タカ

女子の仕事と申せば、直ちに裁縫を連想致します。まことに裁縫は、女子にとつて最も大切なものでございますから、昔より殆ど女子の生命であるやうに、よく仕込みましたものでございしますが、近頃女子教育の進歩と共に女子も色々の六つかしい學科の多くを覚えねばならぬやうになりました。獨り裁縫の爲めに時間を費やす事は出来ぬやうになりました。殊に、俯向さがちに針ばかり動かしてゐるのは、何だか趣のない氣の利かぬものやうに考へ、純白のエプロン麗しう苞丁の使ひ方鮮かに天晴食道樂の奥様となられても、針の運びは思ふ様にならず、一寸したものの積り方も、裁ち方も甚だ覺束ないやうなことが少くありませぬ。誠に憂ふべき現象と申さねばなりません。この点に於て本校に學ばれる皆様方の幸福を、喜ばすには居られませぬ。

裁縫は、第一に仕上げが精巧に縫へねばなりません。

しました方が、着心地もよく、又、すらりとして恰好が宜しいやうに思ひます。小袖は、後幅七寸五分の、前幅六寸が普通の様でございします。長襦袢は、後幅七寸五分、前幅七寸より七寸五分位がよいと思ひます。羽織は、これと反對で、後幅は小袖と同じく七寸五分とし、前幅を少しく狭く、四寸五分と致しました方が、からだにしつくりとあつて、大變恰好が宜しいものでございします。

ニ 長襦袢や小袖の身八ッ口は、着よい爲めに三寸五分から四寸位明けますが、羽織の身八ッ口は、一寸五分から二寸位に少く致しますと、形に縮りが出来てよいものでございします。

ホ 長襦袢も衿を抜いて着ますので、前身丈を長過ぎる位に致して置させんと工合が悪い様ですから、前下りを一寸五分から二寸位に致します。

以上は、ほんの一部分の御話で、此の外に未だ未だ工夫をし、考案をせねばならぬ事は澤山でございします。お互ひに、従來の裁縫術にのみ頼つて居ないで、之等の諸点に就いて常に研究的の態度でなくてはなりません。



# 文の園

## 家庭の團樂

第一學年一の組 來多島八重子

國家は、家庭の集合であります。家庭は、國家の本であります。家庭の團樂は、やがて國家の團結をなす本であります。

世にはいろ／＼の樂がありますが、家族の者が朝に夕に膝を相並べて食膳を共にし、又夜は打ち揃ひて相語るなど、家庭團樂の樂はさ愉快なるものは他にはありませむ。家族互に禮儀の中にも和樂あり、談笑の中にも禮讓のあるを、誠の家庭といふのであります。げにもかやうな家庭には常に長閑な春の風が吹いてゐるやうに平和であります。思ふに人間の幸、不幸は、必ずしも貴賤、貧富によるものではありません。

家は貧しくともよくその家庭が齊ひ、四時笑聲が聞え、和樂の氣の充ち満ちて居るのが、家庭の幸福なのであります。よし家に多くの寶があり、壯麗な家に住んでゐるども、その家庭齊はず、悲哀の聲漏れ、争ひなどの絶え間なく起るのは、不幸の極みであります。

世に慕しき物はかすかすある中にも、故郷にまざるものはあるまじ。人一度故郷を離れば、先づ心に浮ぶは、故郷の慕はしき念なるべし。熊毛郡の南端、その半島こそ我が故郷室津なれ。後に皇座の峯高く聳ゆ、前は世界の一大公園、その園池とも見るべき瀬戸内海に面す、鏡なす大海原より打寄する波、いと静かなり。朝日夕日を負ひて、島がくれ行く、眞帆片帆の影ものどかにして、農夫の三々五々鎌を背負うて、歸りを急ぐさまもいとつかし。此春までは親しき友と交りて、常に嬉戯せしを思へば。そのなつかしさいはむかたなし。今や他郷に在つて、學びの友と共に、勵み勉めて、登雪の功を積み、このなつかしき故郷に歸らむことを、唯一の樂となせり。

## 秋の朝

第一學年二の組 岩田フミエ

山寺の鐘の音にふと淡き夢よりさめし我は、つと立ちて窓の障子を開きぬ。

靜かに空を望めば、天に一點の雲もなく高澄にして玲瓏、美しきこと碧玉の如く、清きこと明鏡の如し。實に尊き宮居を見る心地して止まず。

地亦一塵なく、水蒸氣地面に滿つ。窓下夕顔の葉に

故に和樂の氣充滿せる幸福な家庭を造り、快活な精神、健全な身體を造り、大きくしては國家、小さくしては家庭の義務を盡さねばなりません。

家庭の團樂は、國家團結の本であります。一國の人心に團結心があれば、決して外侮などを受くることなく、その國益を榮え、其の國威いやが上にも宣揚するものであります。

## 朝

第一學年一の組 堀上ヨシ

「久坊かきないか」と、臺所から母の呼ぶこゑに驚いて、がばと跳ね起きた彼は、無意識に井戸端に出た。そして、いつもの様ふ、楊子をくはへて、しつとりと朝露にしみつた農園を、ぶらついた。どこからともなく、冷々しい風が襟元をかすめてすぎると、桃色のハミガキ粉がパツ／＼と青い燕の葉に飛んで行く。その落ちつく下には虫の音が水の様に流れてゐた。靜な、そして清らかな氣の漲つた朝、彼れの心も亦清らかであつた。

## 故郷

第一學年一の組 吉崎綾子

ああ、如何に故郷のしらはしくなつたかしさよ。

も、園圃蔬菜の莖にも、銀玉と宿りし朝露は、どもすればこぼれむとす。

枝より枝に引きたる蜘蛛の糸は、露に濡れて白絹の光を放てり。清くうるほひし大氣は實に秋の自然なり。あゝ、自然、やがて出づる日の光を浴びる萬物は、すべてよみがへりて、此の尊き自然を稱するならむ。

## 秋のゆふべ

第一學年二の組 陶村園子

赫々たる太陽も早や西の空に傾き、薄紫の雲は次第／＼に迫りて、靜かなる夜の幕は近づきぬ。

街ゆく人も數へるばかり。唯見ゆるはわづかに残れる夕餉の煙、曇り行くみ空に志都岐の山をさして歸る群れ鳥、それも今はいと少くなりて、耳に響くは觀音院の鐘、淋しきゆへの静けさを破りて、あたりを傳りぬ。見る内に太陽は最後の光を彼方にながして、西山に没しぬ。

はるかかの海の、浪の音はいと淡く、寄せては返す荒浪は、一刻毎に死を迫れる様なり。見ゆるは星、開ゆるは草葉にすたくこほろぎの聲。

仰ぎ見れば月は限なく澄み渡り、涼風さつと吹き渡る。あゝ、淋しき悲しき秋のゆふべよ。

家庭の團樂

第一學年二の組 林 文

家内中が楽しく面白く夕食を終へてからは、風通しのよい八疊の間へ集まるのが常である。姉上が他家の人どなられてからは、兎角淋しくなり勝ちであつたが、それも何時か忘れられた。そうして此の頃では此の涼しい間に集つて、父上の面白いお話を承つたり、滑稽な落語を讀んでいたりして笑ふのが、唯一の楽しみとなつた。

思ひ出せば去年の此の頃、父上の御病氣のために、楽しい日どてはなかつたが、今年はおくまで御全快あらせられたので、家内中の嬉しさが一入である。

樂しきまとも (日記の一節)

第二學年一の組 松本 静子

三五の月は、みねの浮雲ぬぎすて、すら／＼どのびし青桐の梢にすむ渡り、木々の葉末の白露におぼつかなくもやどりて、玉かどうたがはる、景色ぬもいはれず。岐草提灯を芭蕉の傍の軒につるして、祖母君はじめ弟妹に至るまで、縁側にてにきはしき團樂をしぬ。垣根の萩の葉よりもれくる涼風に、青すたれはゆるぎていと心地よし。祖母君は昔の御殿生活の話をし給ひ、兄君は幼かりし時のいたづら話、母君の御物語、さて

家庭の團樂

第二學年一の組 岸 静江

は弟の魚釣り自慢もいであぬ。妹の片言交りに歌ふ桃太郎の歌にひき入られ、我は得意の歌出せば、兄君の床しき尺八、姉君のやさしき琴なども出で、合奏のさんざめき。母君は満足げに茶菓子など運ばる。風鈴におどづる涼風に、浴衣の肌すが／＼しう覺えて、このみは平和の樂園とぞみぬし。あゝ、楽しきは此のまごぬ。

凡そ人の一生は長さも六七十年を限りとす。されば同じく一生を過ごさむには、家族和睦び、相助けて常に春風のそよぐ如く、和氣鬪然として、楽しく愉快に生涯を送りたきは、誰しも望む所なるべし。然らば如何にせば、家庭の團樂の樂園を作り得べきか。

先づ祖先を尊崇し、両親によく事へて孝、兄弟姉妹は友愛にして、兄弟は弟妹を愛撫し、弟妹は兄弟を敬愛し、夫婦は互に愛情を以つて和合す。而して婢僕を愛憐し、又婢僕は主人の恩徳を謝して、陰日向なく勵まは、家庭は常に和氣鬪々として、少しの凝りなかるべし。かゝる家庭を作りなば如何に楽しき極みならむ。これに反し、家庭の團樂を缺ぐ人の不幸は如何ばかりぞ。

流 離

第二學年一の組 松本 八重子

さて家庭に於ける團樂の基は、婦女子たる者の務にして、誠意、忍耐を以つて常に春風の如き徳性を有し、如何なる勞をも厭はず、夫の示す方針に遵ひよく家政を整理し、幸福なる家庭を作る事に心を盡くさるべからず。然れども楽しき家庭を作らむ爲め、過りて華美に流れば思はぬ不幸になげくことあるべし。楽しき家庭は却りて質實、謹嚴なる生活をなす家におり。畏れ多き事ながら、教育勸語にも

父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シと、のたまはせ給ひて、家庭團樂の教を諭し給へるにあらずや。女子たる者は必ずこの大御心の程を體し奉りて、若き時より寸時の油断なく、他日主婦となりて、家庭團樂の理想を達せしめて可ならむや。

細い／＼線香に似た三本の糸にすがつては、人知れず涙する事もあらう。樂しかつた往時の夢が、繪巻物の様にせまぬ胸の中をゆき／＼して、遂にたまらなくなる事もあらう。は／＼と絶え入るやうに荒んだ唄が、三味線につれて、顔へつゝ、遠ざかり行く。次第に消え行くその音に名残惜しい涙を誘はすには居られなかつた。嗚呼、流轉の人、流離の人。

吾等の學校 (又正々年)

第二學年二の組 瀧口 澄江

蜿蜒起伏せる連山の麓を、洋々として流れ來れる阿武川の清流に沿ひて建てる洋館模造の校舍、これを我等が日日勉強に修養に勵みつゝある學舎なる。

こは維新の際、偉大の功績ありし舊藩主毛利忠正公の生ひ立ち給ひし所、又淑徳高き毛利貞松院殿の住ませ給ひし所、即ち南園の御殿跡に建てられしものなり。名は阿武郡立實科高等女學校と稱し、時勢に適應すべき家庭的の婦人を養成するを目的にて、明治四十五年四月より開校せるも、校舍の全く落成せるは其の年六月にして、開校式はその翌年十一月三日に行はる。さて校門を入るや、二つの築山あり。一は萋々たる古色に南園の昔を偲ばしめ、一は紫ある頌徳碑に永

久原家の美德を懐かしむ。其の左右には農園・花卉園ありて、四季折々の草花麗都として研を競ひ、美を闘はし歴々として眼底に映す。玄關に入れば、正面に豊田先生の筆に成れる瀧淵臺先生夫妻の繪畫あり。永く夫人の善行を我等が手本にもと師の君のみ心盡し、我等冥々の裡其の感化を受くる事鮮からず。其の左に事務室、向ふに校長室、教員室ありて、裁縫各教室これに連ちり、行々詰めの所は理科教室なり、二階の中央は廣大なる講堂にして、左右には普通教室各々二室あり。この階上より見渡せば、左方は綠翠滴る連山にして、遠近に藤、躑躅の異彩を放つもあり。右方は志都岐山巍然として遙に雲表に聳ゆ。校舎の南方にあたる古の御殿は、いと瀟洒にして質朴なる構造なりしを、今に保存せられて、之を南園館と稱ふ。其の階上は四時の眺めに宜しく、其の階下には上段の間あり、茶室あり、書院等ありて、我等の作法室に供用せられぬ。庭園は砂白く年老いし木々、苔むせる石、そここゝに點綴せられて、うららかに當時の面影を偲ばしめ、又誠に追懐の情に堪へざらしむ。この南園館に添ひて建てる二棟の寄宿舎あり、其の室名は松・竹・梅・菊・藤・萩・桃・紅葉の舎と名づけられ、室毎に夫々其の舎の名に因める松林桂月畫伯の掛軸あり。これ實に我等が精神修養の一助となりぬ。

深夜虫聲を聽きて

第二學年二の組 師井 あい

秋も早や最中の頃とはなりぬ。さわ／＼と吹く風は、

午前六時三十分、身支度をなしていとなつかしき學校に急いだ。時々おどつれる香もなき風が、たまたまなつかしうて、高きみ空を見上げた。青い／＼み空、そこには塵程の雲もなく、たい小鳥の一群が東の方に飛んで居るのみである。あゝ夢の様な静かな朝。寂しい町を通りて大橋に出た。夜半の雫で洗ひあげた清い橋の上に立つて、しばらく清い流れをみつめてゐた。緩く流るゝ水はまだ眠つてゐるかのやう。河畔のしだれ柳は、肌さむい秋の朝風にゆら／＼と揺いで、丁度洗髪を氷鏡に向いて梳るやうである。をちちの茅屋からは、朝の炊事の煙が立ち昇つてゐる。澄みきつた青空より風吹く毎に岸邊の萩の花を散らす。折しもサツと吹いて来た朝風に、萩の花はほろ／＼と散つて、清い流に落ち、小さい波紋を描いた。嗚呼滿目荒涼の秋も、いよ／＼深うなつた。私はいつにない寂しい感興を抱くのであつた。

後れてはと急いで歩き出した。こんもりと繁りあつた深緑の夏蜜柑畑は、無限につゞいて低い農家をおほひ隠してゐる。そして朝露に洗はれた木々は、一層の神々しさをおほはしてゐる。ヒヤツと冷さを感じたので、はつと仰ぐと、青葉の葉末からぱたり／＼と玉の様な朝露。やがて賑かな精米所のひびきとよこにして、やうや

身にしてみても寒く、はた／＼と窓を打つ木の葉の音も亦淋し、遙に聞こゆる鐘の音も今ははや絶えて、唯雁がねの鳴く聲のみして、蟋蟀の聲に、あはれ夜も、いたう更け行きぬ。

空は如何にと窓押し開けば、天高く月影いと、さやかなり。見渡す限り紅葉ならざるはなく、又庭の彼方を眺むれば、玉敷き渡る草葉の露にやむせぶらむ、虫の聲々いと盛りにて、ワン／＼と淋しく鳴くもあり、チンチロリンと鈴を振る如く鳴くもあり、又能く聞けば、ついでを刺せとぞ鳴くもあり。回顧せば、今年も秋はなかばを過ぎぬ。さりながら、今迄に何をか得し。外には身に纏ふべき衣もなく、内には修めたる才だになし。心のつゞれ刺さてやは、衣の袖を刺さてやは。嗚呼あしたを待たぬ虫の聲々、いたく我が心を動かすものかな。折しも吹き来る風に、燈は消されぬ。いと淋しと思ふ間に、空はかき曇り墨を流せる如く、忽にして雨、忽にして風、砂を飛ばし、木の葉を捲き、俄に世の中すさまじうなりければ、心ちらずも扉を鎖し、内に入りぬ。されど尙窓外の事ども思はれて、あはれ其の後虫は如何になりしぞ。いと／＼あはれに感じぬ。

登校の道すゝ

第二學年二の組 溝部 ハナコ

午前六時三十分、身支度をなしていとなつかしき學校に急いだ。時々おどつれる香もなき風が、たまたまなつかしうて、高きみ空を見上げた。青い／＼み空、そこには塵程の雲もなく、たい小鳥の一群が東の方に飛んで居るのみである。あゝ夢の様な静かな朝。寂しい町を通りて大橋に出た。夜半の雫で洗ひあげた清い橋の上に立つて、しばらく清い流れをみつめてゐた。緩く流るゝ水はまだ眠つてゐるかのやう。河畔のしだれ柳は、肌さむい秋の朝風にゆら／＼と揺いで、丁度洗髪を氷鏡に向いて梳るやうである。をちちの茅屋からは、朝の炊事の煙が立ち昇つてゐる。澄みきつた青空より風吹く毎に岸邊の萩の花を散らす。折しもサツと吹いて来た朝風に、萩の花はほろ／＼と散つて、清い流に落ち、小さい波紋を描いた。嗚呼滿目荒涼の秋も、いよ／＼深うなつた。私はいつにない寂しい感興を抱くのであつた。

後れてはと急いで歩き出した。こんもりと繁りあつた深緑の夏蜜柑畑は、無限につゞいて低い農家をおほひ隠してゐる。そして朝露に洗はれた木々は、一層の神々しさをおほはしてゐる。ヒヤツと冷さを感じたので、はつと仰ぐと、青葉の葉末からぱたり／＼と玉の様な朝露。やがて賑かな精米所のひびきとよこにして、やうや

く學校に着いた。

### 秋夜の追懷

第三學年一の組 野村文子

人をかこたしめし空一面の黒雲、心ありげに消ぬ失せて、水よりも清う澄み渡れる眼路も遙けき千里の空に、月は皎々と冴え、實に繪を欺くばかりある秋の夜、思は遠く東西の歴史に、悲劇の幕を留めたる忠臣英雄の心中を思ふともなく様々のことを思ひ出でぬ、あはれ流れ行く身をばしがらみともなりてよと聞か上げしも、九重の雲井や深かりけむ、罪なうして配所に月を眺めし菅公。あるは膽を嘗め、薪の褥に起臥しては、隙もる軒の松風さび、夢結び得ぬ丑の刻、やれし垣根にすたく虫の音に、袖を絞らし越王勾踐。あるは己が眼には不能の字なしと、さすがに驕りけむ月日も夢と過ぎて、あはれセントヘレナに流されてよりは、晴れたる空も曇りがちにて、空わたり行く雁が音に故國を偲びしナポレオン等、大和敷島は更なり、外つ國の雄々しき人すらも歎は同じくかゝる折にてぞありけむ。わきて都の空も今宵を限に、あすは陸奥に吾がむくるを照せかしとばかり月に調ふる笛の音の、いかに悲しき秋の夜の離別なりけむと、新羅三郎が故事さへ偲びぬ。我が思

動の姿とはなりぬ。

あゝ園の草木よ、たゞ黙として汝に對すれば怒もなく、名利もなし。何處よりか、清香脈々風に從ひて來り我を薫徹す。

### 十文字原

第三學年一の組 吉岡タケヨ

十日市から山中丁へ、山中丁から御許町に抜けた十文字原、此處は、その昔修羅の巻となつた事もあるとか聞く。それかあらぬか、何となく懐しう、友に後れて只一人の時をぞ、鐵蹄の音高く、劍戟の光物凄かつた往時偲びつゝ、私はよくこゝを通つて歸るのである。

四方の山々花曇りして、空高う雲雀の囀る頃は、廣々とした田の面が、淡緑に、黄に、紅に、紫に美しう彩られて、花の香慕ふ蝶や蜂が、長閑な舞踏を續けて居る。

月日が歩んで、眞夏の太陽がワリワリと照りつけ、哀れ草の葉も縮む時、洋傘傾けて行けば、こゝばかりは涼しい風が、さつさつと東から西へ、北から南へ氣持よく吹き通す。彼方此方に姉妹かむり白う、赤い褌かけて草取る人の、鄙歌歌ふ聲がゆるうゆるう青々とした稻の上を流れて、思はずうつとりとなる事もある。そここゝを黄なる紅なる星の様な柿の實が飾つて、志都岐の嶺

此處に至れば坐にうら悲しく、思ひやるせなう月に向へば、さすがに名残ゆかし、桂の花の香高し。願れば我が身の影、疊の上に印する疎桐の影よりも細し。

### 農園の朝

第三學年一の組 下間静子

露は新緑を被ひて青滴をこぼし、そよ吹く風にまかして、ゆらゆらと靡くも風情あり。我は農園を逍遙して、青葉に向ひいとも清新の趣を味ふ。

我が足音に蝴蝶は夢より覺めしにや、胡瓜の葉蔭をいたく蹴たて、教室のかなたへと飛び行く。葉は驚かされたる様に舞ひ、露を次ぎの葉へ送る。露は銀玉の如く、再び次ぎの葉を宿せしが、終に我足もどにはらはらと落つ。我等の手植の稻田、水稍々減少すを見るや、釣瓶を手にす。あたり静かあるに、たゞカラカヲどの音は、遠く響き渡る。阿武郡土圍を見れば、日本海は昨日の雨にて漫々として、小さき汽船は萩の沖邊に漂ふもをかし。二三の友ども黒の作業服にて、青く理める間を點綴す。鋤を取り出し耕すはどに、中より蚯蚓の飛び出づるも、あはれに覺えつ。

日光我を射て、茄子の花に照り、葉の隙間もどめて面を出す。胡瓜金緑色に映はて、地も空も心地よき活

の大銀杏が、稍々色づく今日この頃は、一面に黄金色と變つて、風吹く度にみづみづとした穂がさわさわとゆれる。路の両側には、野菊蓼など淋しく咲いて、キチキチと鳴きながらいなごが行先を横切つて飛ぶ。

やがてこの貴い黄金も、汗を流して草取りし人の手に刈取られて、切株に木枯冷う吹さすさぶことであらう。冬はかなりに寒く、小雪降る日は、尺餘の路がぬかるみとなつて、下駄の齒深うはまり込む。けれどやつぱりこの情緒深い景色に、無限の床しさと懐しさを感ずるのである。

### 月夜の感

第三學年二の組 竹内文子

月は早や山の端を離れぬ。そよ吹く風にさそはれて氣もそよるに、木立繁き庭に歩を進めぬ。秋告ぐる蟲の音いと物あはれげに、高く低く長く短く節れもしろげにかなづる様、げに妙なる音楽なり。いづこともなく馥郁たる菊の香漂ひ來りぬ。仰げば玉兔皎々として九天にかゝり、銀河そのはどりを流れ、折々出づる白雲は、月姫の飄す白綾の裳裾の如し。葉末にやせりし白露、いとも美ごとくにきらめきて、時々渡る涼風に拂はれて、惜しげもなく散り碎くる命のあはれさよ。あは

れ清き月、見る人千々の感あらむ。

遠き筑紫にうつされ給ひし菅公の、「去年今夜待清涼」の句を口ずさめば、誰か感涙にむせびさらむ。又榮華專横をさほめし道長の、「この世をば我が世と思ふ望月のかけたることなしと思へば」の三十一文字は、當時藤原氏の豪奢不足なかりしことを偲ぶべし。思へば去年の今宵は、なつかしき父母と楽しきまことゝして、澄める月を眺めしに、今は遠き東の里にすおはしぬる。月は去年にかはらねど、われのみはこの明月を誰と共にか見む。明月を望めば、悲しき心を慰むる如く將來の光明を誘ふが如し。我は夜の更け行くとも忘れて、それへくと思を馳す。

あゝ。あの明月の如く曇りなく、常に潔白にして貴き光を秘めて、たゆまず心の胸に鞭打ちて、學びの林奥深くふみ分けて、まことの輝きを身につけむ。折しも何處の寺の鐘の音ぞ、淋しげに餘韻ながく響き渡り、木の葉二つ三つ舞ひ落つ。

母の恩

第三學年二の組 桂木 トヲ

過にし十一年の水無月といふに、我が暮ひまつりし父上は、冥い冥い彼の世の旅へと出て立ち給ふ。當時

埋火のあたりのどかにはらからの

まどむせし夜ぞ戀しかりける

ど古人の詠せし如く、一家相よりて楽しむのぞけく生活するは、眞に人生の至樂なりと謂ふべし。

平常他郷に在りて、或は學び、或は勤め、愉快なる生活をなすども、暑中の休暇などにて、我が家に足を踏み入れむか、其の時の感如何ばかりや。

此の尊き家庭の團樂の樂しみは、その家族のものゝ心の融和に依りて生ずべきものなるべく、如何に父よ母よ兄上妹よと相呼ぶも、一人にても心の中に隔あらむか、眞の團樂はのぞむ能はさらむ。

樂しき家庭の團樂は、畏くも勅語に示し給へる、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和すと云ふ御訓を眞に服膺してこそ始めてつくることを得らるゝなれ。

我等將來の勤めは、一家の團樂を圓滿に指導すべき主婦とならざるべからざれば、今より其の覺悟にて萬事に注意して修養に努め、主婦となりし曉には、善良なる家庭をつくることこそいとも肝要ならめ。

歸省

補習科 安田 ヨシ

白雪皚々、六花繽紛たる時、冬期休業を迎へしも、

我は、未だ東西の分別すら辨へ得ざりし幼兒なりければ、何も感ずることもなかりき。されど手傷を負ひし荒獅子の、だんだん痛さに苦しむ如く、我が幼き脳裡に刻まれたる悲しみは、成長するともどもに、益々深く、今尙慈愛にこもる両親の下に暖かさ夢を食らるる友を見、我身を顧みしこと幾度ぞ。

父の死後、母はかよはき女の身一人にて、常に四人の泣く子の上を思ひ、あらゆる艱難辛苦を圓はれぬ。又母は常に親なき子よと後指さるるを、と教へ給ひぬ。今の自分、過去十一年の自分、母よりうけし教訓如何。母は愛子に對するに、何物をも恐れ給はず、總てをなげうちて愛子の爲めに盡くし給ひしなり。病氣といへば、終夜枕邊につき親切に看護し、心に慢心これにはよく制し、不正に走ればよく教へ給ひ、今日人並の智徳を得るに至りしは、實に母の賜なり。あゝ慈愛深き母よ。あゝ尊き母よ。我はせめてこの御恩に對して萬分の一なりとも報いむとて神に誓ひぬ、亡き父を慕ふ毎に、母の御恩の偉大なるに感謝し感涙に咽ばざるを得ざるなり。

家庭の團樂

第三學年二の組 岡本 ミツ

過ぐる月日の早くして、早や夏期休業とはなりぬ。七月二十一日、暫時の別を告げて歸途に着かむとて車を馳す。僅か三里の車道、中に中國山脈の支脈を横斷し、心の急ぐこととて進みの速きを覺ぬ。道々草薺の軒の上にはせる梅干は、暑さを包みて赤く色づき、吹き來るはこりのその風には、流石に路傍の晝顔も色褪めて、田舎の道中言はむかたなく寂しく長閑し。今やで他郷に在りし身に、今更ながら見廻さるゝは、眼界の景色なり。山々の静寂、變りなき水の音、物古りし鎮守の森、草深き茅屋は、住める人の心も見ゆ、長閑なる軒端の畑に、樂める里の女の姿も思はれて、獨り打ちうなづかれぬ。車は早や我がなつかしの古里の村に入り、人々に顔を見らるゝも恥かしく、特に小學校兒童の、我を見て口々に言ひ傳へ集り來て、禮するなと恥しけれども又うれし。

「れゝ今歸りしか」と、母上の笑顔に迎へられて、住み馴れし家に入りしは、夕陽西に傾く頃なりき。短き不在の間にも多少の變化は認めらる。和氣霽々たる母上は、一入の慈愛を以て我が健康を悦ばれ、祖母は殊に悦ばる。父上も「變りはなしか」と、うち笑まれぬ。あまりの悦ばしさに、そゞろ落涙し、只短き挨拶して、一家團樂の内に夕餉をすましぬ。やがて時計の十時を報じた

れば、殘惜しくも口をつぐみて臥床に就く。夜は靜にして心安らかに、微かに開ゆる戸外の風の聲に、悠然として人生の至樂の境に入る。嗚呼、人生の至樂は必ずしも紫白紅塵の内にあらざるなり、紫白紅塵の内にあらざるなり。

秋

補習科 米原 ハツメ

騒がしかりし木々の蟬は、いつしか松虫鈴虫の聲と變りぬ。山路行けば見上ぐる峯見下るす谷、皆紅葉して黄ならざるはなし。岩に映ゆ、水を染めて風もまた黄ならむとす。蒸したる粟の如き女郎花、露さへおける萩の花、筆の如き尾花、紫匂ふ龍膽など誇りがはに立ちて盛り見せたり。

默然として行けば落葉ふむ音、我ながら凄く聞ゆる鳥の聲梢にあり。栗のいがの自らはじけて、はらりと實の落ちたる後は、ひつとり靜になりぬ。空の色にも、木の葉の響きにも、すべて乾ける如き様ありて、漸く秋の深さを思はしむ。

野路行けば稻の收穫さかりにて蕎麥は雪の如く、甘藷の畑はます／＼繁りて、百舌鳴く村に、柿の實のはかに赤み見せ初めぬ。

歸雁のたより

左の三つのお手紙は、本年八月二十九日開催の第二回同窓會に對し、送られたるものなり。

在鹿兒島 舊特別會員 植村 秀枝

昨日といひ今日と暮して飛鳥川流れて早き月日に候て第一回同窓會開會につき御招きにあづかり候ひしは昨日の如く思はるゝに早や一年は過ぎ去り第二回の會をとて係員の方よりの御手紙に接し嬉しく存じ候近くにて候は、萬障くり合せ出席致しおなつかしき皆々様に御目もじの上昔話の數々に日頃の望みを果さむに如何せん百里のかなたたる想像致すのみ私事すでに御承知の方も御座候はむが去る四月當地に來り専ら家事に従事致し居り候あいらしき教へ子を相手にせし昔に比しては平凡の生活の様に思はれ候こゝに日頃の感を少々のべて缺席の御詫にかへ申し候

卒業生の數も三回二百に近き人に上り候由固より御校の眞價は入學者や卒業生の數の多少により定まるべ

ふりさけ見れば、夕日花やかに稻の上を照らして、夕空また希望多からむとす。

巡禮

補習科 能美 満壽子

陽炎もゆる暇路を、 笈をば肩に杖ついで、  
まだ道なれぬ旅の子は、 破れし築地に身をもたせ、  
今來し方を眺めつゝ、 深き思ひに沈むなり。

あゝ漂泊の憐れさよ、 花はこぼれて散りかゝる、  
祖母にさゝたる懐しき、 阿波の鳴門の巡禮を、  
今見る如き心地して、 泪は頬を傳ひけり。

ホロ／＼となく山鳩は、 木立がくれの古寺に、  
撞木をとりて雛僧が、 力をこめてうちならず、  
夕べの鉦に驚きて、 森を暮ひてとび去りぬ。

赤き脚絆の巡禮は、 塔に入る日を送りつゝ、  
泪に交る御詠歌を、 高く悲しく歌ふ哉、  
あれ復み寺の鉦の音が、 野邊を渡りて響き來ぬ。

里の灯チラ／＼と、 心ありげにうごくなり、  
されどいとしい旅の子の、 姿はふた／＼見ぬさき、  
あゝ名もなき村に入る頃は、 南國の春も暮れてゆく。

さものに候はず皆様卒業生の活動力應用力の如何こそ御校教育の成否を左右するものに候へされど皆様麗はしき堅實なる秋實科高等女學校風を成し上ぐる上に二百といふ多數の精神的團結力の結果は如何ばかり著しきものに候はむ即ち各自が在學當時に訓育せられし主義のまゝにその特徴を發揮させつゝ、それか自然に統一する全體としての力その力を以てせめて山口縣各地方部の娘達を善きに導き主婦となりては堅實なる家風を作りてその出入往復する隣人親戚までも暗々裏に感化し次第に廣き範圍に及ぼすに至りなば美しき校風の花は眞に實を結びたりとや申すべき

現代のさる女子教育大家が次の様なる事を述べられ候度度か修身科などにて學び得られし皆様方に對しては贅言の様候へどもせめては又想ひ出でたまふすがにもなれかしと御耳に入れたく候

〔東京を標準とせる家庭は地方には適切で無い地方の家庭は一層根底が深く堅實な代りに保守的で物質上からは生活の程度が低いのが普通である(中略)所謂良妻といふ意味を廣く見て良妻たる外に家族親族に對しては良き嫁となり家の職業に關して出入する人々に對しては良き奥さんとならねばならぬ(略)主婦としては



家事中で一番早く起きて一番遅く寝る早く起きるのは家族が機嫌よく早く仕事に取りかゝる用意で遅く寝るのは一日の整理と翌日の準備との爲である家族の氣風から衣食其の他に對する趣味をよく飲込むで居て折々氣を利かすことが大變な慰藉となる家族の留守の間は命の洗濯どころか甲斐々々しき働を見せる折だと思つて平素よりは一層いそしむ決して樂を貪らぬ老人の肩を揉みながら團欒の話に軽い冗談も交せて花咲かせると未だ半年も経たぬ間に庭や座敷も片づいて大變廣くなつたやうに見ゆる板縁や道具類が光り出して家中が明るくなつたど賞められる佛壇の中が格別奇麗にあつて朝夕供物をする初物や到來物は何時の間にか供へておるのが格別老人の氣に入る何時の程にか御先祖の命日もおぼれて相當の祭をする家内の者の誕生日やその他をの記念日には心許りでも馳走が出來て家族が樂しむ親類交際の手紙は一切引き受けて氣輕に認めるいざと云ふ急用の場合には立つたまゝですらすらと美しく書く掃除の序にはお床の花を手輕に手際よく生け替るので姑が満足する家族の者の衣類は總て一人でせつせと縫ふ至つて速いが割合に手器用で誰にも著心地がよいと喜ばれる野菜や魚を料理するにも大袈裟なことはせぬ

よく工夫して珍らしい物を拵へる家の内の萬端の取廻しは解らぬこともあるがよく相談してするので失敗がなく又氣を悪くする者もない解つたら順序よく敏捷にやるので何時來客があつても家内の食事の後れるやうな事はない子供の泣聲もあまり聞かず叱る聲も聞かぬが鷹揚に品よく黙けてある近隣親戚の者どもはその手腕にいつも敬服して居る經濟にかけてはあつて、に贅澤をするでもなければ無くとも愚痴もこぼさずいゝ工合にやり繰りする客の歸つたあとで火鉢の火を消しておく位は氣がつくがいゝ公共の爲とならば貯金も出して惜まぬ道理の立つたところがあるはじめの程は女學校の卒業生といふので親戚や出入の者も何だか氣遣つてゐたがいつしかよく出來た嫁さんだよい奥さんだともてはやされる家内の知り合ひの處へは通りがかりにも氣輕く立ち寄るので先方からも折り折り尋ねてくる老人の注意で時々里へ行くが直ぐかへる姿勢の眞直なのは御免蒙つて着物の着こなしの上手なのと腰を下げて挨拶して通るので人は各々ぬ應接は静な方なれども言葉は明快でお愛想がよい聞き上手で物の解りがよく相手の話に花を持たせるので何時も面白く談させて歸すいそがしい中を何時新聞を見るのか客の話の種類に

あ、「天才も健康美貌も健康而して德行も健康に因る」とか申せば皆々様益々御健康の術をはかられ度念じ上げ候  
かしこ  
八月十一日

在滋賀縣 舊特別會員 松宮 シヲ

よりては立派に應答もしてゐる随分冗談をいつて笑はせる事もあるが客の出来によつては争ふだけの氣骨は具へて居るよき嫁の働き振りで家門繁榮の中に美風が生じ郷黨親戚の間にも傳はる様になる終生他のための犠牲とあつて働いてこれが自分の務であると思ひ女子の本能を發揮したと自覺して大なる愉快を感じ幸福なる生涯を遂げることが出来る女子でなければならぬ(下略)至つて眞面目な理想殊に地方の要求に適ひし條々御校の卒業生の中にもところどころの主義の實行者としてあらはれ給ふは誠に嬉ししくも亦心強き事にて候「女學校卒業」を鼻にかけ又は一かどの偉き者になりたるが如き者を抱き得べきものに候まじともすれば自分と云ふものを忘れ易き私達はその忘れたる自分の爲に自分をうらぎらるゝ事も少なからず候されば「汝自身を知れ」と諭し給ひし哲人もあるにて候  
今はとてまなびの道に忘るなゆるしのよみを得たるわらはへ(明治天皇御製)  
高山のかけをうつしてゆく水のひくきにつくを心と  
もがな(昭憲皇太后御歌)  
何やかやと思ふ事どもかきつゞけ自分を省すれこがましき申條の數々失禮の程平に御免蒙り度候

殘暑厳しく御座候折柄會長はじめ各會員の皆々様にはいかに御凌ぎ遊ばされ候や來む二十九日には第二回總會御開催遊ばされ候よし御懇切なる御案内頂き有難く御禮申上候  
御當日は定めし御盛會の御事と存じ陰ながら御祝ひ申居候私事此度富士登山をば思ひ立ち去る十四日出發の途中列車中にてなつかしき南園會よりの御便りをいたゞき富士頂上まで持參仕り候次第にて土産はなしなりども聞は上げむと存じ候へども筆のまはらぬ生れつき今更くやしく存じ候此度は女子ばかり生徒をも合せて九人登山致し候何分にもはじめての事故萬事様子わからず登りし方々に御經驗ばあしとば伺ひ申候處十六貫目もあるあなたにはとてどもと頭よりはねつけられには困り申候途中倒れし人の話などいろいろ聞かせられ候へども一度思ひ立ち候事をば體の肥はたる

故を以つて中止するにしのび先づ足がたれぬに伊吹に登山致し候處至つて平氣にて一先づ安心仕り候十六日午前四時いよいよ登山強力をば二人雇ひ申候處候等は私をば指さし此の先生にはとても登れぬなと後にてさゝやま申候まゝ御心配は御無用大丈夫ですとて管笠にいと身輕に装ひばつばつと出かけ申候大宮より次第に爪先上りのいと長き袂野をば過ぎやつと八時前に一合目に着こゝよりはよほせ山道らしく相成二合目にて晝食午後五時にははや八合目に投宿致し候

午後六時頃には影富士も見ゆ千變萬化の雲の海實に浮世を離れて覺ゆ申候翌朝は御來光を拜し五時半過ぎ出發萬年雪を口に頬はりて胸突八丁もいつしか過ぎて午前七時頂上に着天氣都合もよろしく大元氣にて先頭第一にお鉢まはりを致し強力をばおぼろかし申候下りは七合目にて晝食こゝよりは名高き砂走り相成候處丁度都合よく打水したらむ様なる雨降り塵も立たず二合目まで一息に下山仕り候其愉快さ面白さとても經驗なき方々には御想もつかぬ事と信じ申候こゝよりは傾斜次第にゆるやかと相成足の運びいと輕く覺ゆ申候袂野にては女郎花松蟲草いたどりなご慾深う採集致し午後八時過まは汽車中の一人と相成十八日午前八時半無

事に歸宅仕候手折し花も生よろしくまことによき土産と相成申候登山には氣をせうぬ事が第一とつくづく感じ申候此の度の登山は伊吹よりも疲れなく中途にて倒るゝなご想像もつかぬ様覺ゆ申候  
翌朝よりは朝より夕まで禪がけにて家事の手傳に忙はしくはやく御通信をば可致の處留守中より母が少々不快にてやすみ居り候まゝつい延引致し大至急にて書き候まゝ亂筆の段幾重にも御詫ひ申上候時節柄御一同様には御身御大切に遊ばされ度候  
かしこ  
八月二十五日

在岡山縣 舊特別會員 伊原 夏

昨今の殘暑殊の他に候處此度第二回同窓會には皆様御揃ひ御出席の御事と推し上候私も二十九日御舉行の事承り昨年第一回同窓會當日を思出し皆々様なつかしく只一言なりとも御話致し度亂筆ながら此に筆取り申候  
扱て其の後皆々様には御變りも無く凡ての方面に御活動の御事と存じ候御別れ致してより半年二月月常々は御無沙汰のみ致し候も皆様の毎日の生活に心の平和を念じ居り候

筆どめ申候終りに皆様の御健康と幸福とを陰ながら祈り居り候  
かしこ  
八月二十七日

因みに、伊原先生の坊ちやんは、九月二十二日、死去せられたる由、先生の御心の内如何に、吾等この悲報に接し、同情の涙堪さわぬす、こゝに謹みて、弔意を表す。

左の文章及和歌及び御手紙は、この會報第三號發行につき特に送られたるものなり。

月夜の舊都

在鹿児島 舊特別會員 植村 秀枝

「ふと書物を繕けば一通の古き手紙誰ならんと見るに第一回卒業生山本幸さんよりにて過る年奈良に旅行せられし時の感想認ありき何となく懐かしく舊都の秋！月夜の故郷を偲びてこゝに皆様の御想像の料にもなれかしと認むるになむ。」

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」と百人一首を口吟みつゝ深き印象を與へし生

南園會より何か修養談をどの事に候もとても私には其の力御座なく候へば近状など御話致し樂しきむしるにと陰ながら加はり度と存じ申候扱て私事皆々様と御別れ致してより實家の方にありて皆様と同じ様家庭の人となり朝に夕に御地の思出に暮し申候五月末に男子出産此に私も母と相成り申候「子を持ちて知る親の恩」どか實にもどつくづく感じ居り候

初めての母となりての今日此頃の生活は一日中汗の乾く間にては御座なく何とはなしに多忙に暮し居り候一時は産後の肥立ちも如何かと心配致し候も此の頃に相成り身體も丈夫となりいといと子供世話致し居り候間御心安く思召し下され度候子供も殊の他丈夫にて丸々と肥ゆる日々智恵づく様覺ゆられ候例の眼鏡かけて子供を抱き居る様皆々様の御想像にまかせ置き候

家庭に入りて誰も感ずる事に候は毎日朝より夕まで同じ事のみ繰り返し何等得る處なきとかこち候私も時として此感じを持ち候も ささ毎日を通して初めて自己の人格と相成り候と思へば同じ事繰り返す様思はるゝ毎日は尊き事と存じ候まは修養の二字も遠き所ではなく手近にある事をお互に感じ候事と存じ候  
御話のつき候はねどあまり長く相成り候へば此にて



れ故郷の三笠山頭の月と、隈なく澄み渡りたる月夜の  
寧樂の美觀とは妾の腦裡に深く浸刻され、爾來南船北  
馬異郷漂零の秋に於ても、月に對して暮郷の念、轉  
禁する能はざるものありき。

之れ、仲麿が肺肝流露の和歌の感化方に依ること言  
ふまでもなければ、亦、尊き香の漲れる古建築物に  
富める舊都の美觀が、月光を浴びて、一段の光彩を放  
ちし古き都の空氣を味ふ事を得たる印象にあらざるな  
きか。如斯舊都の空氣も文明の波、進々と押し寄せ  
來りて自然を毀したりといふも、今なほ三笠山頭を、  
離れたる月の、秋の空に澄み渡りて幾百星霜の雨露を  
經たる、五重の塔上に懸り、衣掛柳の影をひたせる、  
猿澤の池に、金蓮とくだけ、五十二段より三條に走れ  
る池畔に、月を浴びたる柳の樹下、露を帯びたる芝草  
に、松蟲鈴蟲の鳴く音、幽に、樹の盡る彼方、八角形  
の南園堂を、黒繪の如くに點出し、池を隔つる元林院  
の青樓を漏れ來る絃の音と相和するなど。

人影散と盡して、春日野に、妻戀ふ鹿の鳴く音聞く  
ことを得たる仙境。古き都の夜の閑寂、月夜に乗じて  
、春日なる一の鳥居を入りて、二の鳥居に進み、古杉  
臺々として、月光を遮る樹立の下を辿れば、一種壯嚴

乙女子の高ふりあるは小憎らし、  
萬づに低ういでよわが子よ。

七光る金に比べて幾そう倍、  
たふとさふみの効驗あげたべ。  
二年わが手中の玉どめでし子の、  
今はいづ地に如何にねはさん。  
残しおさしわが教へ子を思ふかな、  
かたき花をも實をも結べと。

在東京 校外會員 三好 嘉子

秋立つ雲の見ゆ候てより未だ幾日もたち申さねば、  
流石に千々の木の葉は紅葉せねど薄雲に飾はれて月前  
に横たはる一行の雁影に一味の新秋をねば候時しも  
、南園會報第三号御發刊の御様子承り眞に目出度う存  
上候

夏季の休みに喜びの袖に包み難う校長先生始め諸先  
生並に皆々様御目にかゝりて榮しみあへるもつかの間  
にて、遠く東の空に向ひ申し候てより早や一ヶ月ばか  
りは過ぎ去り申し候、過ぐれば早き歳月もなかく、に  
永き心地致し申し候て皆々様御なつかしさ堪へがたう

なる春日野の神域に在るを直覺すべく、虫の音はこれ  
神前に神樂女の捧ぐる鈴の音を聴くが如く感すべし。  
この境過ぎて、三笠山麓に出で、草を踏みつゝ、土佐  
繪のまゝなる、山に登り見よ。俗塵茲に消えて、二月  
堂、大佛殿、の古建築物は眼下に横はり、市街の燈火  
は夜船の船の火の如く輝き、古き都の香と、紫の水蒸  
氣とは、ヒシ／＼と身邊に迫り來りて、舊都の空氣を  
眞に味合ことを得べし。更に首を廻らし觀よ、木津川  
の流れは遙かに、布を延べたる如く、眼下に入り、松  
蟲鈴蟲の妙音は、足下の叢に遠來の客を慰むべし。  
之れと同時に、想を古の寧樂の都の歴史にはせ、而  
して後、阿部仲麿が異郷に於ける、暮郷の心事を、三  
十一文字に依つて、追懷せば、三笠山を出でし中空高  
く輝く頭上の月に、無限の詩趣を感じ、月夜の舊都を  
深く／＼印象するを得ん。

教へ子を思ひて  
數知れぬ教へ草生ふ遠路を、  
心して行けあだに踏まざれ。  
金ぐさり金の時計よ指輪よと、  
親にねたるなわが教へ子よ。

會報にて皆様の御消息承はるの嬉しさに、かくはまは  
らぬ筆執り申し候。

初秋の黄昏は流石にうら淋ひしう候て、護國寺の鐘  
の雜司が谷の森を鏗ふて遠くなり響く時、名も知らぬ  
虫の野もせにすだ、音にも、若草萌ゆる丘の上の薄き  
緑のさしそめ申して、まろかなる日の物語りにむつふ  
も嬉しう候ひし南園の庭に、春は櫻の花蔭に秋は楓の  
木の下に、誓もかたき姉妹の語りひつさせぬ三年の間  
を思へば、野路の村雨晴る、間をしばし木蔭に宿り候  
にも奇しき縁のありと聞き申し候ものを、いかで深き  
思ひの候はすてや。

種々の思ひ胸に溢れ申し候て、さては農園のさま食  
堂のもやうどりどりにそれよりそれへとほてしなく、  
御慈愛籠れる校長先生の講堂にての御訓話、いち／＼  
に身にひびく様思はれ申し候、又黒き作業服に鍬鍤手  
に／＼とそこに一點のけがれなく一點の虚榮なく、赤き  
御心青葉に籠めてかひがひしく御働さ遊ばす其の氣高  
さ、皆々様の御姿の美しさ、清けさは、身に幾ばくの  
錦を飾れるとも尙ほ／＼及ばざる思ひの致され候て、  
阿武川の流れのゆかしきがごとく偲ばれ候てなつかしう  
存じ申し候

去る日私は井上圓了先生の哲學堂を訪ねて一日を過し申し候、道すがら都大路の塵の卷を後に一步一步清き空の秋氣漂よふ田圃に出づるに、流石に昔の徳ばれ候て、はてしなき武蔵野の原の山無きをなごとなう物たらぬ思ひして、増穂の薄穂に出で誰を招くらむなよなよと靡くに我れ應じつゝ、小さきあせ道とばくど歩きたつゝ、未だ黄金ならざる田面に案山子の立ちたるなぞ見ては心はとぞろに故山に走せ申して、一昨年はた昨年の昔史蹟をたづねつゝ、皆々様と旅行致し、時の樂しき愉快さに一人頗笑みつゝ、やがて哲學堂に着し申し候、六賢堂、唯物園、唯心堂、靈命館など見歩くにつけ高雅なる空氣によわされつゝも、ありし大照院のさま東光寺はては羽賀臺のさまなど目前にみゆるがごどく思はれて、その壯嚴なる様とてなければもいかにも崇高なる心地は同じ様致し申し候

嗚呼歴史多き地に多くの偉人烈女を出しし地に、しかも忠正公の生立ち給ひし由緒深き舊跡に育てられし私共、いかで其の地其の名をけがされ申すべき。我が家出で立ちし彌生の春誠の光に道を輝し、わみなの幸ある高き御教へを、此の身に守りて母校のためにつくさばやと、心に誓ひて出でし地や、離れし學び家

## 本校の一年史

(大正三年十一月より  
大正四年十月に至る)

### 會 報 部

#### 一、椿八幡宮神社の參觀

大正三年十一月三日、我が校にては、先帝の聖徳を偲び奉るべく、本日午前聖蹟講行はれ、又開校式舉行の記念日なればとて、その記念講話も次いで行はれ、午後よりは、この日紀念の心にて、都波岐神社を參觀せしめらるゝこととなりぬ。

諒閣中のことなれば、勇める中にも、何となく晴れやらの氣勢のはの見えて、道の歩み、休の様、終始つづましやかに行はれぬ。

午後一時半、椿八幡宮の社前に達す。禮拜了りて、この宮の史蹟につき校長先生のお話あり。それより神社に上る。苑は社殿の背後靈椿山の山ふところにあり。廣ささまで大ならぬぞ、椿の郷、萩の里、さては島山

を思ひ出せば、いかであたに月日のすどし申さるべき深き願想は泉と湧き出で渴仰の祈りは胸にあふれ申し候

わはれこれまで御卒業遊ばされし姉様方よ、此の又なき學び家の爲めに母校のために共々に、身も心も今こそ捧げ候て貴き御教へを實現せむことを日々祈り居り申し候

思ひあまりて筆につくし難う候へども、在校の皆様よ、暮るゝを急ぐ若き日を學びの女神と守られつゝ、我が世の風はいかに騒々ども、月の桂を手折らせ給はむことを、遠きく東の空より神かけて祈り申し候

思ひのまゝには筆まわらぬに心もどなう候へどもあまりにくだくしうながく相成り候まゝ、これにて惜しき筆止め申し候

時節柄皆々様の御健康あけくれ念じ申し上げまいらせ候

十月十二日

かしこ

遠く見えかくれする往來の船さへ、一眸の中に收め得て、陸に海にその眺め又なく麗し。「この苑は椿村青年會の丹誠に成りたるもの、神意を慰め奉ること大なるべく、又詣づる人の享くる便も勤なからざるべし、美しき、會のいさはしや」と校長先生は眞心こめて説き聞かされぬ。

お話を了りて、南園會よりお菓子のお仕向あり。吾等は苑内に圍居して之を戴く。趣味殊に深し。見渡せば、野も山も一面に秋寂びて、木々の錦笑しからぬにあらぬぞ、吹く木枯に落葉して、哀いみじく感せらるゝ折柄、この神社の秋色のみは、かへりて益々その神々しさを加へぬ。

割愛して苑を下り、再び社前に出で、銀杏の大樹の下に至る。校長先生は、我等のあまりに沈み勝ちなるを見給ひてや、こゝにて、時恰も、我がみ軍の向へる青島攻撃のお話あり。最後に、神功皇后の御女性の御身もて、外つ國までもまつろひ給ひし古事もあれば、尙武の國の女性としては、又勝れたる雄々しき心ながらすてやは」と語勢疎々しく勵まされければ、吾等は頗に元氣がへり、いさどて歸途につき、折しも降り來し秋雨を冒して、我校に歸着せしは、午後四時近き頃にてありき。

二、香川津二孝子の百年祭

香川津二孝子の百年祭は、大正三年十二月十一日、椿東青年會の主催にて、いと賑に行はれしが、木枯吹き荒む初冬の空、ましてこの日は、小雪交りの寒けき雨さへ降り出でたれば、一入深くありし昔を偲ばしめぬ。

その翌十二日、我が校にては、特に二孝子についての講話行はる。校長先生はまづ、「夫孝徳之本也教之所繇生也」との聖句を始め、その他格言數句を掲げて、審に孝行の大切なる所以を説き示され、それより澤三位の筆に成りし二孝子の傳記を讀み聞かされたるが、先生のお聲の高く低く、或は斷じて又續く處、實にや母を念ふ孝子の一心、雪や物かは、風や物かは。あはれ七日のその夜、願は満ちぬ。病や癒む。心弛みし兄弟の、雪に倒れて又起つ風情、躍々として見ゆるかのごと、もはや堪得で泣き伏すもあれば、尙忍び音に、無量の誠を捧ぐるもあり。いづれも深く同情の思に沈みぬ。

朗讀了りて、祭典當日のお話あり。かくて終を告げられたるが、誰が目にも尙露の玉を宿しつゝ、講堂をまかりぬ。

途次或は弘法寺畔に二孝子の足跡を尋ね、或は享徳寺内に鶴臺先生夫妻の墳墓を訪れ、かくて午後一時半、我が校に歸着しぬ。

三、河原先生の退任

大正三年十二月廿四日、第二學期終業の式につゞいて、河原先生に對する送別の式は行はれぬ。

先生は、大正二年三月三十一日就任せられてより、二とせ近きその間、家事・手藝・及び補習科の科外研習として、英語・地理をも受持たれ、又舍監として、寄宿舎の世話に當られたるが、教の道、職の操、皆温き情もて臨まれたれば、吾等生徒は、頼るべき學の母と敬ひて、御在任の永かれかしと祈りしも今はあだ。吾等は式の未だ始まらぬ前、先生の今日は獨、賓客の席に請せられて、お腦重たげに控ゆるゝ様を拜しては、早く已に胸迫まりて心悸の漸く高まるを覺えぬ。やがて學式は宣せられ、校長先生はまづ、河原先生の我が校に盡されし功績と、又割烹の講師として、郡内所々の示導に當られし功勞とを稱へて、深き感謝を捧ぐる旨を述べ、次いで、「先生の退任は、良家に嫁がれて、その家庭を維持せらるべき必要に出でたるものなれば、歎ひてお送りこそ申せ、決してお別を惜むべき

超えて大正四年一月廿五日、この日は恰も陰曆にて、二孝子の身まかりし日なれば、その遺蹟を尋ねむとて、吾等はまづ、二孝子の祈願所としてる名高き、新堀なる金毘羅社に導かれぬ。社前禮拜の利那にも、孝子の佛思ひ浮ばれ、紀念の石碑に鐫られたる、「子弟のかみ教育のもどむ」の撰句を味ひては、云ひ知れぬ敬仰の感に打たれぬ。それより國主の恩命に成りたる、二孝子旌表の撰碑を拜すべく、孝子の居村たりし香川津に至る。碑は新道の傍、田園の中に在り。臺上高く建てられたれば、禮拜の際高き靈威の仰がるゝものあるを覺ぬ。

この碑初は香川津渡頭に在りて、人の訪ふものなかりしを、百年祭の舉行に當り、椿東青年會の、又こゝに移して、孝子の遺徳を世に顯せしものなりと、吾等は深く、會の至れる心盡しに、感謝を表しぬ。それより背後の長添山に上る。山上の眺、二孝子の遺蹟を眺るに便なり。校長先生は老松の下に立ちて、「垢離をとりしはこの汀ならむ、雪に斃れしはあの邊ならむ」と遠近指示して説かるゝこと懇切、松吹く風悲しく響きて、亡き魂吊ふもゝの如く、吾等はこゝに益々敬仰の感を高めぬ。時已に正午を過ぎたれば、思を殘して歸途に着く。

ものならぬと、先生の厚き誼に接し、先生の深き恵に浴せるもの、誰か又得堪ぬ情のなからずてやは。吾等は只どこしなへに、先生の幸多かれかしと祈るのみ。とて、壇上を下らるゝや、河原先生は、代りて演壇に立たれたり。暫くは無言にて吾等の様を見給ひしが、やがて重げなるお聲もていと懇なる別のお詞あり。最後に、「人の一生は、會者定離のことばり免からぬば、お別れ申して歸るべけれど、只身、所を異にするまでにて、母と愛でられ、友と慈しまれし高きみ誼は、永く永く心に刻みて忘れざるべく、朝夕は尙この學校にて睦びあふ思ひいたし申すべし。」と真心こめて告げられたれば、吾等は忍び音の涙堰さあへず、果ては得堪て歎歎の聲さへ漏すものもありき。

先生の席に復せらるゝや、中原キキさんは、一般生徒に代り、三宅節さんは、寄宿舎生徒に代り、誠意こもれるお別の挨拶と、深き御恩の御禮とを述べられたるが、その聲又あはれに響きて、吾等は再び、涙の露にいは知れぬ感謝の誠を表しぬ。

南園會よりの記念品は、中野先生贈呈せられて御挨拶あり。かくて午後三時過、この悲しき送別の式は閉ぢられぬ。先生は、その月二十六日、郷里岡山に向つて出發せ

られたるが、こゝにて新年を迎へられたる後は、東京なる御縁家へ参らるる等なりとか。

#### 四、先生の就任

河原先生に代りて来任せられたるは、前田先生なりき。大正四年一月十六日、先生の就任式あり、その時校長先生の訓示に依りて、先生の人を爲りを知り、吾等は早くも、敬慕の念の湧き出るを覚えぬ。

先生は、家事、英語、數學等を受持たれ、又舎監とも兼ねられたるが、その修業の學校といひ、その出身の郷里と申し、いづれも殆ど河原先生と同じきは、又不思議なる御縁とや申すべき、先生は、就任以來いかにせば吾等のため、學の便多かるべきかと、これまで得給ひし経験と、その豊なる抱負とは、事毎に發露せらるゝ處あり。吾等は益々敬慕の念を高めぬ。

さるを在任六閱月、いたづきの御身を犯すあり、療養のため歸郷せらるゝこととなりたれば、吾等は、全快の一日も早かれかしと祈りしに、その甲斐もなう、越えて八月十九日愈々辭任静養せらるゝこととなりたるは、かへすがへすも遺憾の極みなりき。

先生、希はくは加餐して御身健にならせ給へ。吾等の事思ひ出でらるゝことあらば、折に觸れてのみ教

期する處なからずてやは。さるを敢てその遠きを厭はず、寧ろ望んで参りしは、全くこの學校の名聲を慕ひて、吾が教の理想は、この學校こそ、實現の好場所ならめと、堅く誓ひしに由ることなれば、希はくは吾が真心を諒してよ。」と熱誠溢るゝお話ありたれば、吾等はこゝに益々力強き援を得たる心地して、敬慕の念のいや高く湧き出づるを覺ぬ。

#### 五、郡内小學校長の來觀

本郡内小學校長の方々は、大正四年二月中旬、郡會議事堂に於て集會を催され、萩中學校及び我が校とは郡内小學校生徒進學の關係淺からねば、この兩校に於ける教授訓育の様を視て、相互聯絡の資に供せられむとて、その月十六日まづ萩中學校の參觀を了へ、午後一時半我校に来たられぬ。

折から校長先生は、山口に於ける中等學校長會議に出席せられて、不在中なりしかば、中野先生代りて案内せられ、教授・訓育はもとより諸種の施設に至るまで、悉しく參觀せしめられたる後、南園館に於て聯絡上の協議あり。我が校よりは中野先生・竹内先生之に當られ、その他の先生亦列席して懇談せられたるが、かたみに事情の領知を得て、彼我の裨益甚なからざりし

を賜ひてよ。

山内先生は、この年五月四日就任せられ、國語、農業を受持たれしが、高き齡の御身もて、鉾を握り鎌を持ち、常に先立ちて貴き活動の範を示されければ、吾等はおのづと感化せられ、日々作業も努力加はり、その拂々しさもいやまさり行くを覺ぬ。

聞く、先生は、殆ど三十年の久しき、小學校に在りて、多くの人を教へ導き給ひしと、そのいさはしの恩賞として、我が校に就任せられたる後に至り、勳八等瑞寶章の御下賜あり。あゝ先生の光榮いかに大なるべきか、吾等御教を受けつゝあるもの、亦餘れる光に浴せし心地して、深く敬慕の誠を捧げぬ。

吾等は、不幸にして、家事科主任の先生に離るゝこと屢々、前田先生の辭職せられてよりは、心一入沈みて何となく物淋しき思ひしつゝ、後任の先生の、一日も早く來給へかしと祈り居りしに、この年十月六日、沼田先生來任せられ、この科を主として數學・英語などをも受持たるゝこととなりたれば、吾等は頗る心強く力附きし思ひしぬ。

先生は就任式の時、「吾が今回の轉任は、遠き石川の北地より、西の果なるこの地に來れるもの、殊に両親の居ます故郷をも、遠く離るゝことなれば、心に深く

とは、先生方のお話なりき。

南園會よりは、吾等先生の手に成りしか菓子を供せらる。れ口に召すべきものならねど、我が真心を愛で給ひてよ。

この日吾等のいとも嬉しかりしは、我が故郷の學校とて、教の惠賜はりし、校長先生のお顔を拜せし事なりき。先生は、態と吾等と呼ばせ給ひ、「恙はなきか、厭ひて勉めよ。」と言葉優しく問ひ出でられ、慈愛もれる両の眼には、露の玉さへ宿されつ。吾等は、身に浸む感謝にいらへも曇り、僅に御無事を祝せしのみ。かくて協議了り、薄暮間近に歸られしが、その傍の永く残りて、獨心に感謝を表しぬ。

#### 六、郡會議員の來觀

大正四年度の阿武郡會は、その年二月二十二日より開會せられぬ、本年十月には、總改選の行はるべき筈なれば、我が校にては、創立以來現在郡會議員の方々の、吾等が學びのためにとて、寄せられたる多大の好意を感謝して、この終の開會中、今一度來觀を得まほしとの、切なる心を愛でられてや、開會の第四日、來觀せらるゝ由を聞き、吾等はいと嬉しかりき。

その日午前十一時、榎郡長、瀧口郡會議長を始め、

那會議員、參與員の方々一同來校せられぬ。

まづ校長先生の案内にて、教授に施設に、校内限なく參觀せられ、了りて南園館に請せらる。こゝにて、校長先生より、我が校教育の現在につき、詳細なるお話しあり。榎郡長、澗口郡會議長、その他の方々より、我が校のため、吾等のため、種々懇なるお話し交換せられ、正午過くるも尚止まず、程經て、南園會よりお仕向の晝飯を供せらる。「拙き吾等の手に成りしもの、お口に召すべきものもあらねど、真心だけを愛で給へ。」とは、その時挨拶せられたる生徒總代中原ユキさんの言葉なりき。食後復お話しありて、興趣容易に盡さざるもの、如く、吾等も亦何となくお別れの惜しまる、心地せしは、厚き好意を感謝せる真心の、流露せしものならむか。

かくて、午後四時過、一同は、辭去せられぬ。

この日澗口郡會議長と郡會議員の方々より、各別に金圓の寄贈ありしと、吾等は至れるみ心盡しに深き感謝の誠意を表しぬ。

### 七、補習科生徒の小學校參觀

我が校の補習科には、教育の學科ありて、母としての教育原理を知らしめらるゝと共に、又小學校の教員

中野先生は、來る四月我が校に入學すべき生徒募集の事につき、到る處の先生方と協議せらるゝ處あり。吾等の參觀、又この獎勵の一端となりしとは、後にて聞きし處、吾等は、今更當時の事の氣遣はれて、後向かるゝ心地しぬ。

### 八、第三回保證人會の開催

第三回保證人會は、大正四年三月三日四日の兩日間催せられぬ。

兩日とも、來會せられたる方いと多く、近きはもとより、遠き村々の方々まで、勞を厭はず時を借します、來り集はれ、その盛況回毎にまさり行くは、我が校教育の發展上尤も喜ぶべき現象にして、吾等も亦、我が父、我が母、あるは祖母、あるは姉の親しく來給ひて、吾が修養の様を觀らるゝは、いかに力強く、いかに榮あることならむか、と思へば、今日は一入努力の加はるを覺えぬ。

例に依りて、授業の參觀を始め、校内限なく案内せられたる後、講堂に於いて校長先生のお話しあり。我が校の事情も、已に領解せられたる處多ければとて、今回は一般に渉れるものよりは、部分の事に重きを置き、中にも遊學熱の高き事、遺失品の多き事などは、

としての、教授・訓練の方法をも修めしめらるゝこととなり居れり。

抑、いづれの學問にあれ、理論と實際とを照し合はして、その眞理を求むることは、宜しくなすべき道なるべし。まして、教育は人の心理を研究して、その人格を作るべき學科なれば、二者の調和を得むこと、その必要最も大なるべしとて、吾等補習科生徒は、附近小學校を參觀せしめらるゝこととなりぬ。

大正四年三月一日、吾等は中野先生引率の下に、明倫・白水兩小學校を參觀し、その翌二日、又先生に導かれて、椿東・椿西兩小學校を參觀しぬ。到る處、先生方の、吾等を迎へて、懇に案内せられ、教の有様、躰の模様、さては校内諸種の施設に至るまで、一々觀覽せしめられ、又幼き男生徒の方々は、馴々しく來りて、鬼ごせすやといはむばかり、女生徒の方にて、幼きは、笑みもて迎へ、年多きはつゝ、まじげに會釋しつゝ、いづれも厚き好意を寄せられたるは、吾等の尤も感謝せる所なりき。

吾等はこの參觀に依りて、教育の學の、その實際に照らして、趣味の尤も深き所以を知り、又個性に應ずる教養の、いかに難きかを直觀して、こゝに益々我が教の惠のいかに大なりしかを悟りぬ。

熱誠こめて警戒を加へられたるが、來會者の方々も深くその旨を領せられたる處ありしやに聞く。

又補習科・三年の保證人の方々は、特に場を南園館に設けて、こゝに請せられ、卒業・修了後の目的、及びその心得を主として、我が校を出でたる後の事につき、しみじみと懇談せられたるが、保證人の方々よりも、重要のお話數々出でて、我が校の眞意も十分徹底したるもの、如しとて、校長先生は笑を湛へて喜び居られき。

級監の先生と、保證人の方々との話も、隔意なく交換せられ、成績の事、養生の事、或は躰に、或は用品に、お話しは次ぎより次ぎへと移り行きて、又容易に盡さぬべくもあらず。この間南園會より茶菓の御仕向あり。午後五時過一同漸く退散せられしが、歸途尙立止まりて、「あの材料にて間に合ひしか、お話し品は在合はせのものにてよろしきか。」と吾が子可愛の眞心より、夕暮時の忙しさを打忘れて。後の念までたしかめ置かるゝ方さへありて、吾等はそのみ心盡しの深きを拜し、おのづと感涙のもやうさるるを覺えぬ。

### 九、卒業記念園の設置

我が校にては、生徒卒業の際、その自らの發意にて

常に観らるべき記念の或物、殊に、おのが努力に依りて、生育の期せらるべき物を残し置きて、永くその愛護の念を保たしむると共に、母校を懐ふの情を深からしめむとて、卒業・修了の時毎に、記念園を造らしめらるることとなり居れり。

第一回の卒業は、大正二年三月にて、校庭利用の設計、未だ十分立ち居らざりし時なれば、その際の卒業生は、南園館の小庭内に、清楚なる小園を造られたるが、年と共に物寂びて、その趣今に至りて却りてゆかし。

大正三年三月に於ける第二回卒業生は、山口縣土國の西方に隣りて、萩町土國を築かれしが、その規模稍々大きく、指月の山・阿武の川、その實景又窺ふべし。その年の第一回補習科修了生は、阿武郡土國の周圍に梨の苗木を植付け、果樹結實の實用を期すると共に、その土國を護るべく、これが區劃の生垣とせり。

本年三月の第三回卒業生は、山口縣土國の廓内を利用して、こゝに庭園を設けらるることとなり、まづ我が校庭に珍らしき蘇鐵を主として、松・栢などの庭木をあしらへ、燈籠・庭石の位置、又よく安排せられたれば、その土國固有の趣を發揮せると共に、その眺又愈々深し。第二回修了生は、第二農園の北側に、葡萄園を

設け、これを垣作りとせられたれば、農園の景一段の光彩を添ふると共に、果實の利用又尤も大なるべし。今や趣きかはれる数々の記念園は設けられぬ。卒業・修了せられたる方々の、母校を訪はせられたる時、れのが造れる園を眺めて、「あの木や、吾より太り勝ちしよ。この石や、いつ苔蒸し、か」。「あわその幹、枝の繁るも遠からじ。あゝあの蔓、總の垂る、も、近きにあらむ」。といと笑ましげに見入らる、は、いかに樂しき心地やすらむ。傍の見る目も羨しき限りにてそ。

### 一〇、第三回卒業證書授與式

大正四年三月廿日、第三回卒業證書授與式行はる。本縣よりは、知事代理笹井理事官臨場せられぬ。

午後二時學式は宣せられ、唱歌君が代・勸語奉讀・證書並に賞品の授與・知事の告辭・郡長の告辭・校長の訓辭・來賓の祝辭・在校生徒總代送別の辭・卒業生・修了生兩總代の答辭・唱歌送別告別と、式は形の如く進みて、午後四時終式は宣せられぬ。今回の卒業生・修了生は左の如し。

實科卒業生九十五人

### 一一、本學年の開始

大正四年四月五日、我が校創立以來、第四回の學年は開始せられぬ。

その日午前九時、本學年の始業式行はれ、續いて新入生徒に對する入學式行はる。校長先生まづ、我が校教育の方針、並に入學生徒の心得、保證人の方々へ望まると、注意の事をも、懇に説き示され、次いで在校生徒總代として、大賀政さん歡迎の辭を述べられ、之に對し、入學生徒總代松谷ヨシさんの、お頼の挨拶あり。これにて式は終りたるが、師弟の誼、姉妹の情、こゝに全く結び得られし觀ありて、この式に列せられたる保證人の方々も、誠溢るゝこの様を觀られては、心休みしことなるべし。

それより、入學生徒と保證人の方々は、かねて定めぬの教室に導かれ、こゝにて、級監の先生より、學規及び生徒心得を配附せられ、又入學についての必要のお話ありて、午前十一時全く終を告げぬ。

かくて、本學年の組織は成りぬ。左に先生方の受持學科と各學級の人員とを掲ぐ。

一、先生の受持學科  
校長先生 修身 中野先生 作讀 文讀

### 補習科終了生十九人

學式の時、讀み聞かせ、説き聞かせ給ひしみの數は、卒業生・修了生の深く心に刻みて、どこしなへに感謝の誠を表せらるることなるべく、在校生徒總代として、下間靜子さんの讀まれたる送別の辭、いかに情熱のこもり居りしか、その聲の高く低く、語勢の變はり行く處、いかに悲しく聞こゆしが、吾等生徒の、感に堪はざりしはもとより、臨ませ給ひし方々の御目にさへ、露の玉の宿り居りしを拜しぬ。

かくて笹井代理官並に來賓一同は、卒業生・修了生の物せられたる、成績品を觀覽に供すべく、陳列室に案内せられ、それより南園館にて、吾等生徒のしつらへし祝餅の饗應あり、飾り少なき眞のもてなし、心ばかりを愛で給ひてよ。

超えてその月二十三日、卒業生・修了生は、あらためて南園館に請せられ、わ別の心をとて、かの祝餅を饗せらる。校長先生その他の先生より、わ情深き數々の御話あり、悲しき中にも又嬉しき心地しつ、赤誠の心、潔白の行、さては婦徳の要ある家庭の圓滿、この意味こもれる、賜物を戴き、今更深くみ恵の身に浸むを覺えぬ。とは、その席に請せられたる方々の、後に漏らされし感謝の言の葉なりき。

二、學級人員

坂口先生	數學	前田先生	數學
本永先生	物理	安藤先生	家庭科
藤野先生	農藝	竹内先生	英語
世良先生	裁縫	田中先生	音樂
中野(スエ)先生	裁縫	齋藤先生	手藝
藤井先生	農藝(生花茶儀)		歷史科
			國語
			英語
			體育
			音樂
			美術
			衛生
			保健
			生活科
			職業科
			家庭科

二、**教科の増加**

我が校は、資料と標榜して設けられたるものなれば、その教科は、普通家庭の必要に應じて、裁縫・園藝などに重きを置き、教科の數も亦少なくして、横に狭くとも、縦に深く、吾等の修養して、その内容の充實を期せしめらるゝこととなり居れり。

然るに、現代教育の趨勢は、この範圍の擴張を促して已まず、世の文化の進歩に伴ひ、活社會の要求に應ずることは、我が校教育の發展上、宜しく爲すべき事

なるべしとて、本學年より現代に必要な教科の増加行はれぬ。

地理は、これまでなかりしを、一年より三年に通じて、日本地理・世界地理を加へられ、歴史は、一年に日本史を課せられしのみなりしを、更に二年三年を通じて、東洋史・西洋史を課せられ、圖書・唱歌は、一年にのみ課せられしを、二年三年にも之を課せらるゝこととなり、又補習科には、更に數學・唱歌・農業・體操を加へらるることとなりぬ。

染色の簡易なるものは、家庭の必要多ければ、本學年より亦、家事の一分科として之が教授行はるることとなり居れり。

茶儀と生花とは、その術を修むる外、容儀を整へ、作法を習ふ上に於て、その効果大なるものなれば、之が指導を全ふせしめて、吾等修養の便を得せしめむとて、南園會の經營に依り、この地に名高き、上利先生を増聘せらるることとなり、又筆曲は、婦人のたしなむべき才藝なれども、寄宿舎生徒は、校外に於ての學習の道なければ、亦南園會の事業として、斯道の名手たる福島先生を聘し、之が指南を受けしめらるゝこととなり、いづれも第二期より指導を開始せらる。吾等は、已に學びたき教科増加の希望は滿らぬ。今後は一

入、努力を加へて修養の道を辿り、縦に横に、その内容の充實に勵まひかな。

一、三、**縣下高等女學校校長會議の開催**

縣下高等女學校校長會議は、各校輪番之を引受け、諸種の協議を行ふと共に、親しくその學校の教養並に施設の狀況を調査し、傍その地方に於ける教育資料の研究を爲さむことは、我が女子教育の發展上その裨益尠なからざるべしとて、之を實施することに決し、その第一回は、我が校にて開催すべき筈なりとは、校長先生のかねて語られたるお話しなりき。

大正四年四月七十八の兩日、愈々我が校に於てこの決議に基ける第一回の會議は開かれぬ。

各高等女學校校長の方は、その前日來着せられ、十七日全日、及び十八日午前中の一部に於て諸種の協議を行ひ、尙我が校の教育施設を調査視察せられ、十八日午前中残れる時間とその午後とは、史實の研究を主として、この地附近の名所・舊蹟を尋ね、その翌十九日、夫夫婦途に就かれしが、中には歸校の途次、大津郡立高等女學校を観るべく、同郡へ向はれたる方もありき。その際協定せられたる事項の中、教授・訓育に關するものは、左の如くなりしと。

- 一、御大典記念事業の件
- 二、身體鍛練の件
- 三、風紀刷新の件
- 四、服裝・携帶品の件
- 五、校外監督の件
- 六、新聞閱覽の件

我が校に於ける教育狀況の調査は、校長先生の案内にて、教授・訓育の施設より、校舎校庭の設備に至るまで、殘る限なく觀覽に供し、尙詳細に説明を加へられれば、學校長の方も、深く我が校の用意のある處を領知せられ、中には、「日尙淺き學校にして、かくまで「ローリー」「この上等曲を課せられなば、これにて「ローリー」「來觀の益あり」「参考となりぬローリー」などその感想の端々を漏らされし方もありきと云。

名所・舊蹟の案内には、校長先生・中野先生に當られしが、まづ松本に至りて、松陰神社に参拜し、次いで、故伊藤公爵の幼時住まはれし舊宅地を訪ひ、東光寺に詣でて、毛利家歴代の墳墓を拜し、それより萩町へ引返して、弘法寺畔に前原一誠氏等一族の墓を訪れ、瀧鶴臺先生夫妻の墓は、之を亨徳寺に、山田原欽先生の墓は、之を蓮池院に、共に訪ねて、吊意を表し、途次香雪園に、藤田翁の銅像を觀て、志都岐神社に詣つ。

ここには、暫し憩いて萩城の舊蹟に昔を偲び、歸途天樹院に詣でて、舞元公の墳墓を拜し、それより、玉江橋を渡りて大照院に詣で、秀就公の墳墓を始め、その他歴代の墳墓を拜し、椿八幡宮に参拜して、神苑を觀、歸途金谷天満宮に詣でられたる時は、已に夕暮近き頃なりしかば、ここにて解散夫夫婦宿せられたるが、到る處、由緒を質し、史實を調べ、その得られたる處、又甚なからざりしもの如く、又訪づれられし神社・佛閣の中には、所藏の寶物さへ、特に觀覽の便を得させられたる處もありて、教育資料の研究上、多大の裨益を得たりとは、その時表せられたる學校長の方方の感謝なりと聞く。

吾等は、この會議の最初の開催に於て、吾が學の操勳の跡を觀覽に供せしこと、いかに榮ある心地したりしか、その漏らされたる感想の端端は、いかに強き刺戟を感じたりしか、吾等は今後益々勵みて、この厚き好意に報いむかな。

一四、本年の身體検査

本年の身體検査は、五月十日より三日間、行はれぬ。その検査の結果、之を初年以來の検査に比して、いかなる變遷を呈せしか、左に検査事項中、その尤も重

種目	明治四十五年四月	大正二年四月	大正三年四月	大正四年四月
強健	百人中一五	百人中二九	百人中四三	百人中三三
中等	四六全	四一全	四九全	五五
格	薄弱全	三九全	三〇全	八
脊	正しき	五八全	九二全	九五全
ねぼ	曲れる	四二全	八全	五全
疾	皮膚病	一六人	八人	七人
病	内臓病	一人	三人	〇人

又當時健康の狀態として、吾等の中には、重大の疾患のため、退學の不幸を見られしもの、或は、永き加養を要すべき宿病のため、連月缺席の已むを得られざりしものも、なきにあらぬを、概して云へば、一般の健康漸く良好に向ひ、時に行はるゝ流行病の、その病勢のいかに猖獗なりし際にも、我が校生徒自らは、之に犯されたるものなく、又寄宿舎の健康は、近來益々其傾向を呈し、時に感冒その他的小患を見るのみにて

要なるもの、統計を掲げて、吾等の自重の資料に供しぬ。

、復多く學校醫の方の勞を要せざるに至りしは、我が校生徒の養護上、又尤も喜ぶべき現象なりとて、先生方は、勇み居られき。

吾等の健康、今や斯の如し。希はくは、攝生に、鍛練に、今後一入注意を加へて、益々吾が健康の向上に努めむかな。

一五、越ヶ濱の遠足

大正四年五月二十五日、この日は松陰神社の例祭日なれば、その参拜を了りたる後、直ちに越ヶ濱なる笠山に、噴火坑の探究を爲すべく、吾等の遠足を催さるることとなりぬ。

鷺の聲已に老いたれども、杜鵬未だ月に叫ばず、遅櫻の眺僅に残りて、新緑の裝將に漸く加はらむとす。この行く春の惜しまる、時に當り、校外見學行はる。自然の節物、吾が修養に資する處夫れ幾何ぞ。

午前八時出發、松陰神社に詣づ。禮拜了りて、記念の唐臼を觀る、今更ながらありし昔の偲ばれて、先生の遺徳を仰ぐの情、又益々高まらぬ。これより中の倉通、間道を経て小畑に出で、越ヶ濱に向ふこととなり、途次、故伊藤公爵の舊宅地を訪ひて、偉人生立の蹟を懐ひ、東光寺に詣でて、遙に、毛利家歴代の廟所を拜

し、それより間道に入る。山又山の峽なれば、道の知れざることもやど、この地に精々しき片山ヨシさん、東道の主人となりて案内せられ、曲がり曲がれる小逕を辿りて、漸くにして後小畑の海岸に達す。眼界廣闊、心頓に暢々せしを覺ぬ。これよりは、小波打ち寄する海岸の景を賞しつゝ、午前十一時、越ヶ濱に着しぬ。

辨天社邊縁漸く濃にして、眺清く、園池の遊魚亦悠々樹蔭に浮びて、恰も夏木立を悦ぶもの、如し。吾等は社前に團居して晝飼を終る、食後尙暫くはここに憩ひて、この眺妙なる池邊の景を賞す。

かくて時已に午を過ぐれば、これより背後の笠山に登る。噴火口は山頂にあり。徑の長さ所約十間、深さ、今は埋まりて、約七間にも満たざるもの如し。吾等はここにて數團に分れ、團毎に相扶けて坑底に下る。坑側の地質、熔岩の碎片、研究に資するもの又甚なからず。されど、陰濕の氣人に迫りて、長く止まるを得ざれば、復相扶けて坑を出づ。

それよりは、自由の遊樂を許されれば、おのがヒト山上の眺を擅にし、或は山麓の風穴を探る。遠き鳥山麓にかすみて、定かあらぬを、近く網舟の群れ居る様は、恰も畫に見る趣ありて、そのけしきの清麗又い



ふべからざりき。風穴は、この山の地盤をなせる岩石の、相接する處罅隙を生じ、その罅隙に入りたる空氣は、尤も強く冷却せられ、風となりて出るを以て、之に觸るれば、夏尙寒く、肌戰きを覺ゆるに至れるとか。吾等は、今や宿前に立ちて、その然る所以を直觀しぬ。

それより山を下りて、再び社前の池邊に至る、こゝにて坂口先生の火山についてのお話あり。次いで校長先生は、この地の來歴につき語らるゝやう、「越ヶ濱は、萩城を距ること遠からず、山に海にその眺尤も麗はしければ、毛利氏居城の際は、別墅の地として愛でられしが、星移り時變はれる今日に至りても、かへりてその名益々高く、又その背後笠山にある噴火坑は、休火山の模式として、研究に資すること大なれば、その風景に憧るゝもの、その探究に志すもの、共に來りて、年毎にその數を加ふものゝ如し。この地の盛況又想ふべし。」と云ふ懇に説き示されければ、吾等は深くこの地の重んずべき所以を悟り、「又火山の直觀的研究と、その理論のね話とに依りて、吾が修養に資せしこと、眞に大なるべきを信じぬ。

この時この地の小學校に勤めらるゝ、我が校出身の野上ヤダさん、來りて厚く吾等を遇せらるゝ處あり。

我が校の初建設せられしとするや、毛利家には、特に萩町の請を納れて、この、舊趾の拂下を許し、後又厚く好意を寄せらるる處あり。就中公の染筆を賜はりて、貴き御訓を示されたるが如きは、尤も深く、感謝の誠意を表せし處にして、吾等は日夕、この聖旨を奉體し、謹みて尊意に副はむことを期しつゝありき。今や臨校の榮を得て、親しく尊容を拜し、感喜の情胸に滿つるを覺ぬ。

公は令夫人と共に、まづ校長室にて、我が校教育の實況を聞かせられ、了りて南園館にて暫し休憩の上、晝餐を召させられしが、由緒深きこの館の事とて、鎮守の祠、堤上の松、いづれも昔偲ばるゝよすがなりしならむか。又こゝへは、家従の人々のみ召させられし事なれば、昔ゆかしき數々の御物語もありて、尊意を慰められし事も、亦慚なからざりしなるべし。かくて公は令夫人と共に校長先生の案内にて、校内を巡覽せられ、了りて吾等のため講堂に於て、特に尊意を傳へらる。松浦近侍長は、公の旨を受けて登壇し、「毛利家とこの學校とは、由緒淺からざる關係あり、故に、この學校に於ける教育の消長は、公の深く意とせらるゝ處、今回の來萩に際しても、かく御二九方の臨校せられて、親しく教養の實況を觀覽せられたる事、全くこ

又他の先生方も、吾等を勞はらるゝこと深かりしは、感謝已まざる處なりき。

時に日漸く開けて、西の空暮色の見へければ、割愛して歸途につく、笠山製煉所は、恰も休業中にて、見るを得ざれど、ヨークス製造所は、この途次之を一見し、又道すがら香川津二孝子の碑を拜し、雁島橋を渡りて、住吉神社に參拜す。ここにて校長先生の、今日の遠足についてのお話あり。了りて解散せられたるは、午後六時近き頃にてありき。

### 一六、毛利公爵の臨校

大正四年六月一日、かねて歴代の廟所參拜を主として、來萩せられたる毛利公爵は、令夫人と共に、松浦近侍長その他の家従を隨へ、この日午前十一時來臨せられぬ。

我が校は、毛利家の別邸たりし、南園御殿の舊趾に建てられたれば、我等は常に、貴き城治の昔を偲びて、高き御恩を懐ふの情も亦一入深かりき。殊に、その香ゆかしき南園の由緒の中、忠正公の生立ち給ひし御事と、公の生れ給ひし御事とは、我が校の沿革史上、尤も誇とせらるる處にして、吾等も亦、深く心に刻みて、常に敬意を捧げし處なりき。

の厚き尊慮に外ならず。生徒諸子この旨を體して、修養の道に勉められしことを。」とて席に復せられたるが、吾等はこゝに益々、厚き御惠の身に浸むを覺ぬて、いかにもして、この貴きお示しの旨に副ひ申さばやと、深く深く心に誓ひぬ。

かくて、こゝよりは、大照院の廟所に詣でらるべく、午後一時過、我が校を辞せられぬ。

超えて八月二十七日、學習院在學中の、令嗣元道殿は、暑中歸省の序を以て、この日午前十時來萩せられ、その午後二時家従を隨へ、我が校に來臨せられぬ。

休業中の事なれば、校内施設の状況と、吾等農園當番の爲せる農業實習の様とを觀覽に供せられ、それより南園館にて暫し休憩せられたるが、その間、校長先生並に家従の方々より、南園の由緒につき、數々の貴き御事聞かせられ、「あの堤……」「この庭……」と物珍らしげに指示せられて、深く昔を偲ばせられしやに漏れ聞さぬ。

かくて午後三時半我が校を辞し、直に歸邸の途につかせられぬ。

ああ、かゝる忙はしき御身もて、我が校に來臨せられたるは、いかに厚き思召に由りしものならむか。吾等は深く深く感謝の誠意を表しぬ。

一七、本年の養蠶と稻作

我が校にて、初めて養蠶の行はれしは、大正二年にて、本年となりては、吾等も既に二回の経験を積みたることあれば、もはや、直接指導を受くべき、先生の要なかるべしとて、本年は、吾等生徒のみにて、之に當らせらるることありぬ。

本年も亦補習科及び三學年の方々にて、主として斯の業に服せらるることとなりたるが、特に責任の重きを自覺せらるゝものから、その日その日の當番を設けて、嚴に之に當り、給桑の加減、温度の調節、一入深く意を用ひられたれば、上簇・收繭の結果、幸にも先生方の期待に伴はるべき、可なり成績を得たらむかとて、當事者の方は、喜び居られし。

左に、飼育日誌中の重要なものを掲げて、その成績いかむを知らしむ。  
六月十六日 掃立 蠟量壹匁  
七月十三日 上簇を終る、飼育中死臘病繭を見す  
七月十八日 收繭  
上繭 貳貫八百匁  
玉繭 四百貳拾匁  
下繭 八拾匁

一八、「學の葉」の設定

「學の葉」の設定は、吾等の修養を全うせしめられしとする貴き趣旨に出でたるものにて、本年初めて之を設けられ、第一學期より携帶せしめらるゝこととなりぬ。この「學の葉」についての吾等の心得は、その緒言に懇示せられたれば、左に之を掲ぐ。

- 一、本簿は、本校生徒學の葉として、教育勅語・戊申詔書を始め奉り、本校制定の學規・生徒心得・心鑑等を掲げて、本校生徒品性修養の標目を示したれば、己が日夕行爲の規範となし、益々婦徳の向上を期すべし。
- 一、本簿は、本人の學籍・成績・出席・健康状態等を掲げて、平素努力の結果を示し、又在學中を通じて、その變遷を明にしたれば、從來己が修學の蹟に鑑み、益々將來の奮勵を期すべし。
- 一、本簿には、生徒の人員・學科課程・教科用書・生徒學費・學年曆・南園會會則を掲げて、本校の教授並に施設に關する要件を示したれば、己が學習上遺漏なきを期すべし。
- 一、本簿に收むる事項は、家庭と協力して、その趣旨の貫徹を期すべきものなれば、本簿は之を父兄保

製絲は、九月下旬、本郡蠶業技手貞光先生の指導にて、補習科の方々に當られたるが、養繭の加減、繰糸の手付など、早くも合點せられて、その手際中々によろしかりきとは、貞光先生のお話なりき。

生絲 貳百拾匁  
真綿 九拾參匁

稻作は、昨年初めて行はれしが、鳥害のため、結果十分ならずしも、吾等は尙稻作の経験を得て、その修養に資せしこと尠なからざりしを信じぬ。

本年は晩生梗を作らるることとなり、田地は昨年の處を用ひ、六月二十九日、補習科及び三學年の方々にて、之が挿秧を行はれしが、爾來順調に生育して、穂揃尤もよく、今や成熟の期に入りて、穰々の様觀るを得べく、一粒萬倍の樂、眞にこの間にあるべきを悟りぬ。

本郡三見村惠本民藏氏、昨年我が校稻作の鳥害多かりしことを聞かると、漁業用古網を寄贈して、鳥害防禦の用に供せらるゝ、群雀の來り犯さむとするもの、尠なからざれども、その害、昨年比して多からざるは、全くこの古網あるに由る。吾等はこゝに深く氏の好意に感謝を表しぬ。

証人の閱覽に供して、其領知を得置くべく、又級監の指示に依り、特別閱覽を求めたるときは、所定の個處に檢印を受くべし。

一、本簿は、在學中に於ける修養學習の用に供するのみならず、退學後亦永く己が日常行爲の龜鑑となすことを得べきものなれば、之が保存上充分の注意をなすべし。

我が校の、この簿册設定の趣旨、斯の如く、その内容の事項とその期待の事實とは、又斯の如し。  
表紙には、中央に太き雪輪を現して、その中に「學の葉」の文字を記し、その下、阿武川に因る清き流には、葦生ひ繁りて、飛び交ふ螢の光麗しく、又その葦の繁みの中に、校章の現しありて、その意、阿武川の邊に、建てられたる我が校にて、螢雪の功を積みよとの、貴き旨を示されしものなりとぞ。

吾等は己にこの「學の葉」を携帶しぬ。今より後、吾等の修徳、吾等の啓智、さては吾等の健康に至るまで、己が努力のよしやあしや、その跡、歴然として觀るを得べければ、吾等は過去に省み、將來に奮ひて、吾が修養の道を全うせむかな。

一九、塚本堀切兩監察官の視察

塚本堀切兩内務省監察官は、大正四年八月、我が縣

74

政を監察すべく來縣せられ、その月六日この地に來り、超えて八日我が校を視察せらるることとなり、その日午後三時、監察官一行、野口本縣内務部長、岡村郡長一同來校せられぬ。

休業中のことなれば、教授・訓育の實況を、觀覽に供すべきはなげられぬ、那事業としての我が校の施設を、その視察に供せられむとて、校長先生は、校内限なく案内せられ、要所要所について、詳細に説明せらるる處あり。それより南園館にて休憩せられたるが、その際我が校設置の由來より、建設の計畫、郡内並に埤内の意氣、創立費の寄附、敷地の拂下、南園の由緒、及び教授の訓育實況に至るまで、又審に説明せられ、監察官よりも、種々の質問出でて、我が校の事深く領解せられたるもの如く、中にも、毛利家の援助、久原家の好意の如きは、最もその感を高められしやに聞かなくては視察了り、一行の我が校を辞去せられたるは、午後五時近き頃にてありき。

### 二一〇、知事郡長の更迭

昨年來任せられたる赤星本縣知事は、本年八月十二日、長野縣知事に轉せられ、昔て本縣警察部長として、

在任せられたる黒金大分縣知事、同日本縣知事に任せられ、來縣せらるることとなりぬ。

一昨年以來在任せられたる榎本郡長は、本年七月二十二日、願に依り退官を命せられ、同日岡村熊毛郡長、本郡長に任せられ、超えて廿八日來郡せられぬ。

又郡視學にも更迭ありて、我が校開始の頃より在郡せし、淺田本郡視學は、本年七月二十二日、玖珂郡視學に轉せられ、同日本郡出身なる桂木吉敷郡視學、本郡視學に轉せられ、岡村郡長に隨ひ、その日來郡せられぬ。

左に官報並に縣報に發表せられたる辭令を掲げて、敬意を表す。

- 任長野縣知事 山口縣知事從四位勳三等 赤星典太
  - 任山口縣知事 大分縣知事正五位勳四等 黒金泰義
  - 依願免本官 山口縣阿武郡長(從六位勳六等) 榎俊治
  - 任山口縣阿武郡長 山口縣熊毛郡長從七位岡村勇二
  - 任山口縣玖珂郡視學 山口縣阿武郡視學 淺田五一
  - 任山口縣阿武候視學 山口縣吉敷郡視學 桂木彦一
- 吾等は轉任・退官せられたる方々を送りて、謹みて深き感謝の誠意を表し、又歡びて來任せられたる方々を迎へ、永く指導・援助の榮を賜はらむことを冀ひぬ。
- 就中榎郡長は、郡の統理者として、厚き指導を賜は

りしのみならず、又我が南園會の顧問として、援助を會の發展に與へられしこと、尠なからねば、南園會よりは、茶卓一基を贈りて、厚き好意を感謝せられぬ。又郡長は在任のその間、二ヶ年續きて、大患に罹られたるが、吾等は陰ながら憂慮に堪へず、全快の一日も早かれかしと祈りしに、幸にも輕快に向はれしは、吾等の深く喜び、滿祝の意を表せし處なりき。今回の退官その意、健康快復の加養に在りと聞けば、精々加餐に意を用ひて、御身健にならせ給はむこと、吾等の又切に祈りて已まざる處ありき。希くは、吾が眞心を精れ給ひてよ。

### 二一一、眞鍋中將の來觀

陸軍省參政官たる男爵眞鍋中將は、大正四年九月、展墓の爲め來縣せられ、その月七日午後一時、我が校を觀覽すべく、令夫人同伴來校せられぬ。

まづ校長室にて、我が校教育の概況を聞き、それより校長先生の案内にて、校内限なく巡視せられたるが、その間施設の要所については、中將特に自ら質問を發して、説明を求められ、深き注意を拂ひて觀覽せらるる處あり。了りて南園館にて暫し休憩せられたる後、講堂に於て、我等の爲め一場の訓話を與へられき。

中將はまづ「世間の風潮、動もすれば華美に陥らむとする今日、この學校の施設、どこまでも實科的にして、時弊に超然たる處、全く余が意を得たる感ありて、余は巡覽の際、眞に會心に堪へざりしなり。」とて、我が校の用意のある處を稱へ、話頭一轉、「柔能制剛」と云へることあり。婦人はその姿のかよわさが中にも、心雄々しき處ありて、その優美の力能く、武骨なる有鬚の男子をとりひしぎし事實は、史上その例乏しからず。この「柔能制剛」と云へる金言は、婦人の深く味ひ置くべきものなりと信ず。乃木大將の母堂は、賢夫人の聞け高かりし方にて、大將の幼時、「お菓子かくれよ。」と泣きて請はるる時、母堂はその請のまゝに之を與へ、さて涙たる聲にて、「泣をやめて笑へ。」と嚴命せられたりと聞く、大將の後年武士道の權化とまで仰がるるに至りしもの、母堂訓化の力多きに由る、豈貴き話ならずや。婦人感化の力の大きなこと、これにて知ることを得べし。さて又婦人に園藝の必要なることは、今更云ふまでもなきことなるが、この事につき、内輪の秘事をお話するは面はゆげなれど、吾が妻は、園藝に興味を持ち、殊に養鶏はその最も好む處、これは、余に日々必ず鶏卵三個を要すべく宿病ありて、この料に供せむが爲めなり。それ故、屋敷を求め

むとするにも、余は座敷廻や庭園の廣さを主張し、妻は之に反して、菜園の廣さを好むものから、動もすれば衝突を免かれざることもありたり。」とて、客席に控へ居らるゝ令夫人の方に向ひ、笑みを含みて話さるれば、「元來婦人自ら園藝に従ふことは、家庭を整理すべき主婦の美德とも見るべきか。以上は余がこの學校を參觀して起りたる感想にして、諸子の修養に資することもやと、お話したるなり。諸子その心して、修養の徳を積まれむことを。」とて席に復されたるが、吾等は、趣味深き數々のお話を聞き、感激に堪へざりしもの勲なからせ。希はくば、令夫人のお徳に則り、いかにもして有用なる家庭の人とならむこと、吾等の深く深く心に誓ひし處なりき。

かくて、中將は令夫人同伴、午後三時半歸宿せられぬ。

我が校創立以來、大官・名士の來觀せらるるもの多し、本年に入りては、徳富貴族院議員・澤柳文學博士・三宅文學博士・山根代議士を始め、その他名流の方々の、視察・觀覽せられたるもの又多し、中には、懇切なる注意を促し、或は有益なる訓話を賜はりて、吾等の修養に資せしめられしこと、又實に勲なからず。こ

れ吾等の、常に感謝已まざる處なりき。希はくは深く鑑み厚く思ひて、吾が修養の道に勵まむかな。

二二、御大典記念事業の計畫

本月中旬、行はせらるべき、即位の御式は、我が國維新の大業行はれてより、始めての御事なれば、眞に、未曾有の大典にして、又實に千歳一遇の盛事なるべし。されば國民舉つて、奉祝の事、記念の業に熱中し、いかにせば敬意を捧ぐるに適當なるか、いかにせば、誠意を表するに恰好なるか、或は團體、或は個人、づれもその最善を盡さむと焦慮せるもの、これ又實に我が特殊なる國民性の流露に外ならざるべし。

我が校にては、曩に開催せられたる各高等女學校長會議の決議に鑑み、慈善の趣旨に依りて、吾等のうち家庭の事情已むを得ずして、半途廢學の不幸を見むとするものに對し、これが救済をなすべく、南園會の經營として、慈善獎學金を設けらるることとなるべしと聞く。

この獎學金に關する規程は、左の如く定めらるべし。

阿武郡立實科高等女學校南園會特別慈善獎學金規程

- 第一條 本獎學金ニ關スル施設ハ御大典記念トシテ阿武郡立實科高等女學校南園會ノ特設事業トス
- 第二條 本規程ハ本校生徒ニシテ半途廢學ノ已ムヘカヲナル特別ノ事情アル者ニ對シ學資ヲ補助シ之ヲ成業セシムルヲ以テ目的トス
- 第三條 獎學金ハ獎學基金ヲ蓄積シ其ノ利子ヲ以テ之ニ充ツル者トス
- 第四條 獎學金ノ管理ハ阿武郡立實科高等女學校南園會々長之ニ當リ南園會理事會ノ議決ヲ以テ適當ノ銀行ニ預入ルモノトス
- 第五條 本獎學金ヲ受クヘキ者ハ左ニ該當スル者ニ限ル

最終學年ニ於テ保護者ヲ失ヒ悲酸ノ境遇ニ陥リ又ハ之ニ準スヘキ事情ニ依リ學資ノ供給上半途廢學ノ已ムヘカヲナル場合トナル生徒中操行並ニ成績良好ニシテ身體強健ナル者

第六條 獎學金ノ補助ハ之ヲ受クヘキ者ノ事情ニ依リ其ノ額ヲ異ニスルモノトス

第七條 獎學金ノ補助ヲ受クヘキ人物ノ詮衡ニ關シテハ詮衡委員五名ヲ置キ其ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

抑我が校に入學するもの、その初め誰か成業を期せざるものやあるべし。ざるを半途廢學せむとすること

二二、我が校運

我が校、今や齡を重ねること四つ、固よりその校運未だ我が校の豫期には達せざるべきも、大方各位の同情、年を逐ひて愈々深く、指導・援助の方々の、又益々厚く力を加へらるるありて、今年の我が校は、復昨年以前の我が校にはあらずるべし。

四つの齡の校運として、本欄に收むる如き今日の面目ありとせば、吾等の幸福又思ふべし。依て茲に感謝の微衷を表して、本年に於ける本校史の筆を擱く。

# 本會の一年史

(大正三年十一月より  
大正四年十月に至る)

## 會報部

### 一、第一回同窓會の開催

大正三年十一月廿二日、南園會校外會員のみを以つて組織せられたる同窓會は、こゝに始めて、開催せられぬ。

多くの期待を以て、迎へられたるこの開會の事として、朝まだきより來り集はれし會員多く、中には遠き村々より、別後の情を満たすべく深き希望を齎らして、出席せられたる方々も尠なからざりき。

午前九時開會、唱歌君が代の合唱あり。それより竹内先生開會の辭を述べて、この會開設の理由と、その目的とを明示せられ、次いで校長先生の「淑徳の源泉」と題せる講話あり。先生はまづ「現代思潮の動もすれば浮薄に流れ易き」を切論し又「人は肉の爲めに長命ならんよりも寧ろ靈の爲めに短命なることを、よければ喜び居られき。

### 二、名譽會員と顧問

我が南園會には、已に特別名譽會員一名、名譽會員七名ありて、我が會の發展に對し、援助を與へらるゝこと最も多く、吾等は常に感謝の誠意を表せる處なりき。

萩町増山宗史氏は、我が校の創立に關し、盡力せられたること尠なからず、我が會の事業に對し、寄せられたる好意も亦多大なれば、大正三年十一月十七日臨時總會の決議に依り、氏を本會名譽會員に推薦することとなり、同日推薦狀贈呈、氏の快諾を得て、推薦を了せられぬ。

大正四年七月二十八日、岡村本郡長來任せられ、楨本郡長退官せられて、本會顧問を辭せられたれば、超えて九月二日臨時總會を開きて、岡村本郡長を本會名譽會員及顧問に推薦することに決し、同日推薦狀贈呈その快諾を得て、推薦を了せられぬ。

### 三、年末の茶話會

大正三年十二月廿四日、年末の茶話會は、午後二時より開かれぬ。

れ」と痛告し、理義を叙し、例證を挙げ、説かるゝこと懇切、かくて「婦人は高潔の品性こそ淑徳の源泉なれ」と結論せられたるが、會員の感動尤も深く、中には涙もて迎へられし方さへありき。

時已に午を過ぐれば、食堂にて晝飯の會食あり、寄宿舎の方々、周旋に當られしが、真心こもれる心盡し、又趣味深き團居の事として、會員の方々も深き感謝を表されしやに聞く。

食後又講堂にて各先生方の、趣深く益多き數々の講話あり。最後に中野先生の、この會合に寄せられたる舊師豊田・松宮・高田三先生を始め欠席會員の來翰報告あり。これにて修養方面の會合は了りぬ。

それよりお楽しみみの會合は、南園館にて開かれぬ。まづ會員各自、おのが近況を報告し、了りて、興味に富める福引と調べ妙なる彈琴との催あり。これより故松田先生初め、みまかられし我が會員の靈位を拜して、敬吊の意を表し、再び席に復して、諸種の報告あり。興趣津々として盡さぬべくもあらねど、入相の鑑あたり響きて、舎々の電燈亦點せられたれば、割愛直ちに閉會は宣せられぬ。

この日來會せられたる會員六十三名、初回の盛況斯の如し。將來の會運又卜する事を得べしとて、先生方はなきたに年の別れの會合として、何となく物淋しき思のせらるゝに、今日は、河原先生の送別をかねての開催なりと聞けば、益々心の結ばれて、初めのうちは晴れやらぬ氣勢の、堂内に充ち満ち居れる感じしぬ。

校長先生まづ、この茶話會開會の辭に次いで、「河原先生の送別の會合として、先生の深き記憶に残るべき記念の興趣を贈りたし。」と述べられ、河原先生の謝辭及南園會より寄贈せる記念品感謝の挨拶あり。それより坂口先生は、校長先生に促され、例の十八番の妙話を演ずべく、壇上に上られぬ。哀愁の雲頓に霧れて、先生の未だ口を開かれざるうち、早くも喝采と歡笑とは、堂の内外に響き渡りぬ。先生は、態と徐に咳一暖し、「私は浮れ胡弓のお話をいたします。」とさも幼ならしき聲音にて告げられ、それより本題に入られしが、例の趣多き態度にて、或は聲色、或は手真似、或は身振、と滑稽百出、その妙を盡されたれば、吾等は臍のよるゝに堪へず、果ては餘りの哄笑に、聲の涸れしものさへありき。

それより茶菓の饗は出され、尙數々の快談歡話ありて、午後五時過閉會せられたるが、吾等は坂口先生の好意によりて、一年中の苦はこゝに一掃せられたれども、河原先生に對する誠意は、永く永く忘れざりき。

### 四、卒業生修了生の送別會

大正四年三月二十四日、今回卒業修了せられたる方々に對し、本會の送別會は、この日午後一時より開催せられぬ。

校長先生はまづ「南園會は、特にこの會を開きて、送別の誠意を表す」と告げられ、これより竹内文子さんお引受側の總代として「永き年月、妹と庇ひて愛でられし、お禮は言葉に盡くされしと挨拶さるれば、中原エキさん、お客側の總代として、「やよ、吾等こそ、お禮は申さぬ、よくも姉とし敬はれし、南園のこの睦び、行末長く忘れ申さじ」と真心こめて答へられぬ。

あゝ、師弟の誼、姉妹の情、身離るゝともいかにか變はらひ。南園の香益々もかしく、阿武の流愈々清くなるに共に、吾が契のいや深くなりまさり行けかしと、語り合はねど心に誓ひぬ。

それより餘興に移られたるが、先生方はじめ、吾等生徒の中よりも、詩吟・謠曲、その他數々の演藝出で、或は勇壯にして懦夫亦立ち、或は悲痛にして頑夫亦泣くの趣ありて拍手喝采鳴りも止まず、その間茶菓のお仕向あり。

歡喜の色外に現はるれども惜別の情内に滿つるものれて、吾等は轉々感賞を禁し得ざりき。會は午後三時閉ぢられぬ。

### 六、總會の開催

大正四年七月二十日本年度に於ける總會は、その日午前十一時より開催せられぬ。

校長先生先づ會長として、總會開催の辭及び我が會運に關する感想談あり、それより、竹内先生庶務部理事として、前年度經費の決算、役員改選、その他重要會務を報告せられ、了つて新會員歡迎會に移り、新舊兩會員、相互交歓の誠を表して、姉と慕ひ、妹と愛づる、貴き情誼は、又深くこゝに結はれき。

本日の晝食は、農園に於ける吾等努力の結果を愛でられむとて、茄子と胡瓜とは調理せられ、又入れられしお茶までも、皆吾が手入の賜物なりと思へば、一入趣味の深かりしを覺えぬ。この間蓄音機の演奏あり。幼き生徒のお話に、榮螺の自慢の憐むべきを知り、名高き國士の演説に、大和魂の貴むべきを悟りぬ。それより又茶菓のお仕向あり。興趣益々加はりて、いつ果つべくも見ぬざりしが、長き休に歸へらるゝ、寄宿の方々の準備もあればとて、割愛して會を閉ぢられしは、午後三時過なりき。

なきにあらねば、誰が目にも誠の露を含みつゝ、午後四時閉會と共に解散しぬ。

### 五、學藝會の開催

學藝會は、大正二年九月十九日始めて之を開き、談話・速算・早經等を課せられしが、その成績初會としては稍々見るべきものありきとは、其の時に於ける中野先生の講評なりき。

大正四年五月二十八日、この日は、我が會創立の當日なれば、その日記念の心にて、第二回學藝會は午後一時より開催せられぬ。

今回の學科は朗讀・談話・唱歌の三つを選ばれたるが、材料の配合、演者の人選その宜しきを得て中々に趣味深く、東海道の旅路には、富士琵琶の景色偲ばれ、曾我兄弟の旅立には、母子恩愛の情想はる。中にも大賀政さんの新聞朗讀に次いで之感想談は、いかに清くいかに快く聞ゆしか。唱歌合唱の華やかさ、その獨吟の沈麗と相俟ちて、益々深くその趣の添はりしを覺えぬ。

今回の成績、もとより未だ、先生方の期待には副はざるべくも、演者の方々の努力は、啻にこの席に於てのみかゝりしにはあらざるべく、平素修養の様も窺は

### 七、經費決算と役員改選

大正四年七月廿日開會の總會に於て、報告せられたる前年度經費の決算と、改選役員の名とは左の如し。

#### 大正三年度經費決算

一、收入	一七、三一九
1、大正二年度越高	一一三、三四〇
2、會費	一一、四〇〇
3、寄附	五四、七三〇
4、預金利息	一一、五二三
5、附設事業より生ずる雜收入	二〇八、三二二
計	

#### 二、支出

1、會報第二號發行費	六四、七三〇
2、献進贈遺吊慰費	二二、九七〇
3、運動器具費	四、五四〇
4、書籍新聞代	七、四四〇
5、養鶏費	六、六三〇
6、養蜂費	四、〇七五
7、通信運搬費	二、五七五
8、雜品費	三、二五〇
9、雜費	八〇、二五五

計 二〇六、四六五

差引残高 一、八四七

大正四年度へ繰越  
別に基金預入左の如し

一、基金 一、〇〇〇、〇〇〇

内 防長銀行預入 五〇〇、〇〇〇

五十銀行預入 五〇〇、〇〇〇

以上

二、改選役員氏名

學藝部

理事(司書) 中野先生

理事(陳列所主事) 安藤先生

理事(陳列所副主事) 藤野先生

理事(副司書) 世良先生

部長 片山 ヨシ(補)

委員 下間 静子(三ノ二)

榎 雪子(三ノ二)

石川 ハル子(二ノ二)

瀧口 澄江(二ノ二)

早川 照子(一ノ二)

大石 サト(一ノ二)

吉賀 フサ(一ノ二)

運動部

理事 本永先生

理事 坂口先生

理事 山内先生

部長 内藤ヨシヨ(補)

委員 世良 菊野(三ノ二)

佐々木フサユ(三ノ二)

松本八重子(二ノ二)

小河 キク(二ノ二)

岡本 朝子(一ノ二)

有吉トヨコ(一ノ二)

會報部(庶務部の事務を兼ね)

主任 竹内先生

理事 田中先生

理事 中野スエ先生

理事 齋藤先生

部長 摺見 菊代(補)

委員 吉岡タケヨ(三ノ二)

竹内 文子(三ノ二)

松本 静子(二ノ二)

溝部ハナコ(二ノ二)

堀上 ヨシ(一ノ二)

委員

會計部

理事 主任 河村書記

部長 河野 千世(補)

委員 江山タキヨ(三ノ二)

難波ハツ子(三ノ二)

乃美ハツエ(二ノ二)

山根 幾子(二ノ二)

松尾 治子(一ノ二)

林 文(一ノ二)

以上

その後に至り、中野(スエ)先生學藝部理事兼務、陳列所副主事を仰せられ、水野ハナさん(補)、村木秀子さん(補)の二人は、同部委員を命ぜらる。

沼田先生の、本會に於ける擔當は、追つて定めらるゝ筈なりと。

### 八、第二回同窓會の開催

第二回同窓會は、大正四年八月二十九日、開催せられぬ。

初回の開催によりて、趣味深く裨益多かりしを悟られたると、晝休歸省の方々の便をも圖られたること、

て、今回の出席は又尤も多く、午後會までにて、遂に百名と註せられぬ。

午前八時、午前會開會。まづ國歌の合唱ありて、竹内先生開會の辭を述べ「創業者たるものは、又守成者たらざるべからず」と警告せられ、次いで校長先生の「現代婦人の注意すべき要點」(本號致の園欄に收む)と題せる講話ありき。先生はあらゆる時弊を指摘して、その注意すべき要點を懇示せられたれば、會員の方々の感動尤も深かりきやに見受けられぬ。それより各先生方の研究談。旅行談あり。又會員の方々の感想談もありて、いづれも深き趣味と多き裨益とを與へらる。

舊師植村(豊田)、松宮・伊原(河原三)先生の、特にこの會に寄せられたるお手紙(本號歸雁のたより欄に收む)は、中野先生に依りて、朗讀せられたるが、先生方の現狀巧に紙面に躍出せられて、親しくお顔を拜せるがごと、深く懐舊の思ふ沈まれぬ。これにて午前會了る。

今回は豫め會員中より委員を設けられ、會の事業の計畫實行、皆委員に依りてあされたるが、その結果尤もよかりきとは先生方のお話なりき。

時已に午を過ぎたれば直ちに食堂は開かれぬ。委員方の心盡し、殊に農園より提供せられたる献立もあり

て、趣味一入深かりしもの、如くなりき。  
食後暫く休憩の後、南園館の持佛堂に安置せられたる、亡き方々の靈位吊拜あり。繋げられたる燈明の光、何となくはの暗く、立ち上る香の煙、亦おのづと薄れ行く思して、今昔の感に涙催さるる方々も多かりき。

それより南園館の廣間に於て、午後會としての演奏會始まりぬ。或は唱歌、或は箏曲、或は琵琶歌、或は謡曲と妙音。秘曲。平生の粹を發揮せられたれば、並み居る方々酔るが如く深き歡賞の感に沈まれぬ。了つて諸種の報告あり。興趣未だ盡きざれども、時已に午後六時を報じたれば、割愛して閉會となりぬ。

### 九、我が會運

「我が會の齡を重ねること僅に四つ、會の事業、固より未だ大に觀るべきものなしとはいへ、大方の同情、我が校運の進展を促さるゝに伴ひ、我が會の事業、亦漸くその面目を改めむとするものあるは、これ又實に喜ぶべき現象なれば、吾等はこの際努力一番、益々我が會運の發展を期せざるべからず。」とは總會に於て與へられたる會長の訓告なりき。

我が校の事業、之を父の務に譬へつべくば、我が會

- 齋藤キク 椿村大谷
- 古橋喜代子 萩町川島
- 西山ヨシ 全
- 河北由子 全 平安古
- 草刈フミ 全 河添
- 野村フジ 全 米屋丁
- 堀江ミドリ 全 江向
- 宮原ヒサ 全 平安古
- 和田秀子 山口町下立小路日高方
- 難波ハツヨ 萩町米屋丁
- 原キク 全 平安古
- 中原ユキ 椿郷東分村
- 三浦ヨシ 萩町江向
- 大中テイ 熊毛郡淺江村
- 藤本ミヨコ 萩町御許町
- 堀千代 全 江向
- 伊藤霜 全 堀内
- 松屋千代 全 濱崎
- 倉田静子 全 西田町
- 山根英子 全 河添

の事業は、之を母の務と見らるべきか。父の務に光輝あらしめらるゝは、母の務の内助の力多きに由るものとせば、我が校運の今日あるは、我が會の事業の、或は之が先驅たり、或は之が扈從たり、又時に或は犠牲たりしに由りてならむか。吾等は父に事ふる所を以ちて母に事へ、母に事ふる所を以ちて、父に事へ、両々相俟ちて、盛運の域に達せらるゝことあらば、吾等の幸福いかにばかりぞ。こゝに、所感を記して本欄の筆を擱く。

### 會告

◎校外會員にして、その身分及び住所に異動ありたる時は、名簿の整理・會報の發送に必要あれば、必ず直ちに通報せられたし。

◎昨年以來、校外會員にして、會費を納入せられたるもの左の如し。

- 金壹圓宛
- 藤田サト 阿武郡奈古村
- 松本早知 萩町東田町
- 大崎レン 萩町南古萩
- 田中文字 椿郷東分村
- 長見キシ子 萩町
- 三宅美智子 全 江向
- 松岡シズエ 椿郷東分村
- 溝部ハル 全
- 山本サチコ 椿村大谷
- 長谷千代 萩町津守丁
- 長井フミ 川上村
- 重枝フキ 萩町橋本
- 山中幸子 全
- 山本政子 全 平安古
- 吉賀トシ 全 濱崎
- 山下サト 椿郷東分村
- 野上サダ 萩町土原
- 伊藤ミチヲ 全 江向
- 伊藤フサ 椿村大谷
- 松村しな 萩町江向
- 松村さく 全
- 中村スミ 布哇ホノルル
- 阿武カメ 椿郷東分村



阿部	秋枝	三村	石井	神代	島田	阿部	田村	大田	中原	村田	河村	三村	中原	河村	竹重	三上	久保田	上原	松原
チヨ	アヤコ	クリ	千代子	君子	スミ	ミサ	操	ヨシ	トラ	テツ	民子	キク	千代	豊子	ハル	チエコ	ミサコ	政子	ツル
萩町今古萩	福賀村	椿村沖原	全	萩町河添	椿村雜式丁	萩町今古萩	椿村沖原	全 渡り口	全 土原	全 江向	萩町熊谷丁	椿郷東分村上野	全	全	萩町橋本	山田村	椿郷東分村香川津	在支那	島根縣

河野	松野	松野	村田	齋藤	河上	多田	三好	安達	田中	原	中村	宮本	阿部	田邊	三好	計金
ミツコ	花子	雪	スエ	ミドリ	千代	マツ	貞子	ハナ	ツルヨ	チヨ	喜世子	カツ	タケヨ	カメ	嘉子	七拾九圓
萩町今古萩	全 土原	全	全 江向	大井村	萩町橋本	椿郷東分村椎原	萩町西田町	椿郷東分村上野	吉部村	萩町土原	全 東田町	全 南片河	彌富村	椿郷東分村	在東京	前年度よりの累計金八拾圓

右は特別會計として郵便貯金に付せり

會 員 名 簿

# 會員名簿

## 特別名譽會員

兵庫縣武庫郡本山村

## 名譽會員

兵庫縣武庫郡本山村

全

兵庫縣武庫郡打出村

兵庫縣武庫郡彦山村

玖珂郡岩國町

阿武郡郡明木村

豐浦郡勝山村

阿武郡萩町橋本町

阿武郡萩町吳服町(吉敷郡大内村)

久原文子

久原房之助

久原清子

齋藤幾太郎

田村市郎

松浦誠

瀧口吉良

榎山俊治

增山宗史

岡村勇二

(大正四年十月三十一日現在)

特別會員

萩町江向(熊本市外黒髮村)	米原 鶴太	本校内教員住宅(吉敷郡嘉川村)	中野 スエ
本校内教員住宅(吉敷郡嘉川村)	中野 貞介	萩町濱崎	齋藤 タカ
萩町河添(福岡縣嘉穂郡碓井村)	坂口 五郎	全 川島(徳佐村)	藤井 二郎
本校内静養室(富山縣西礪波郡津澤町)沼田	恒	全 東田町	中村 彌兵
萩町土原(吉敷郡嘉川村)	本永 旭	舊特別會員	
全 南古萩	安藤 チエコ	阿武郡佐々並村 (死亡)	松田 ハル
山田村川屋敷	藤野 カ子	厚狹郡役所	三隅要之助
萩町平安古	竹内 新三郎	鹿兒島市西千石町一四九 (豊田事)	植村 秀枝
椿村濁淵	世良 ハツ	滋賀縣立女子師範學校	松宮 シチ
本校寄宿舎(都濃郡福川村)	田中 タカヨ	熊本縣玉名郡立實科高等女學校	高田 テツ
萩町細工町	河村 一郎	岡山縣都窪郡倉敷町河原方(河原事)	伊原 夏
全 土原	山内 清次	岡山縣岡山町二番町	前田 直子

校内會員 (年齢順・現住所)

(補習科)

箭島 愛子	本校寄宿舎(吉部村)	榎原 マサミ	萩町堀内
山本 ヲメコ	萩町濱崎	山本 松江	全 江向
椿 嘉子	椿郷東分村椎原	松井 文子	全 川島
吉田 壽美	萩町川島	安田 ヲシ	本校寄宿舎(福川村)
齋藤 マス	萩町檜屋丁寄泊(大井村)	米原 ハツメ	萩町江向(熊本市外黒髮村)
厚東 佐世	椿郷東分村前小畑	鈴木 壽子	全 西田町
南方 京	全 中小畑	國重 静子	椿郷東分村上野
倉増 千代子	本校寄宿舎(高俣村)	佐伯 千代子	本校寄宿舎(福川村)
河田 シズ	萩町土原寄留(玖珂郡米川村)	阿武 文子	萩町土原寄泊(福川村)
倉田 登子	萩町吉田丁	吉武 静	本校寄宿舎(佐波郡中ノ關村)
鹽見 菊代	椿村椿	増野 ヲ子	萩町濱崎
村木 秀子	萩町堀内	山根 豊子	本校寄宿舎(嘉年村)
能美 滿壽子	全 土原	藤原 久枝	椿郷東分村中ノ倉
内藤 ヨシコ	全 江向	山下 マタコ	萩町平安古
金子 シヅ	全 平安古	北村 光子	全 江向
河野 千世	全 土原	能美 キクコ	全 唐樋
片山 ヲシ	椿郷東分村中ノ倉	世良 菊野	椿村濁淵
井上 マツヨ	本校寄宿舎(福川村)	浮里 ミヨコ	三見村
平木 野ハナ	萩町河添	間 菊枝	本校寄宿舎(兵庫縣三原郡松帆村)
金子 清	本校寄宿舎(宇田郷村)	都築 ヲキコ	全 (生雲村)

横山ツル 萩町河添  
井町スミ 三見村  
江山タキコ 椿村雜式丁  
田原秀子 山田村奥玉江  
齋藤キク 萩町御許町  
河村ミト 全 土原  
伊佐キミ 全 橋本  
久保田ヒデ 椿郷東分村香川津  
下間静子 萩町吉田丁  
高壽ヨシコ 山田村玉江浦  
井上富美子 本校寄宿舎(萩町江向)  
石光茂子 萩町下五間町  
吉村キク 椿郷東分村中ノ倉  
安田高子 萩町河添  
末武満子 本校寄宿舎(椿郷東分村越ヶ濱)  
堀君代 萩町江向  
山本チヨコ 全 平安古  
國司八重 椿郷東分村鶴江  
宗樂シゲコ 萩町橋本  
高橋タカ子 萩町江向  
植村雪子 椿郷東分村鶴江

阿武ミユキ 椿郷東分村香川津  
村木フミコ 全  
花村秀子 萩町堀内  
原末 全 平安古  
吉岡タケヨ 全 土原寄泊(高俣村)  
白根光子 全 濱崎  
今地マツ 全 江向  
吉田ヨシコ 全 濱崎  
小笠原マス 全 堀内  
野村文子 全 御許町  
渡邊八百 全 江向  
植村操 椿郷東分村香川津  
重枝トラコ 萩町橋本  
齋藤テル子 全 濱崎  
大田タチ 萩町津守丁  
原田ヒサ 山田村玉江浦  
高木梅代 萩町濱崎  
井本龜子 本校寄宿舎(須佐村)  
前田トヨコ 全 (地福村)  
工藤富美 萩町南古萩

中隈チヨ 萩町川島寄留(島根縣濱田)  
佐々木フサ 本校寄宿舎(生雲村)  
吉山アキコ 山田村倉江  
長谷川トシコ 本校寄宿舎(篠生村)  
野村マツ 山田村奥玉江寄泊(椿郷東分村越ヶ濱)  
中村絹子 萩町川島  
中村ヨシ 全  
桂木トヲ 本校寄宿舎(小川村)  
岩田豊子 山田村奥玉江  
原川壽子 萩町土原  
長見マサコ 全 鹽屋丁寄留(福賀村)  
藤原ふじの 全 平安古寄留(佐波郡防府町)  
竹内文子 本校寄宿舎(佐波郡島地村)  
野上壽恵 萩町土原  
堀綾子 全 上五間町  
中村ノア 全 江向  
惠美須屋ユキ 山田村玉江浦  
齋藤ヤスコ 椿村大谷  
玉井芳江 萩町江向  
藤山ユクヒ 本校寄宿舎(紫福村)  
難波アキ子 萩町米屋丁

原クニヨ 本校寄宿舎(紫福村)  
村上マス 萩町東田町  
石川文子 椿郷東分村中ノ倉  
榎雪子 本校寄宿舎(豊浦郡勝山村)  
岡本ミチ 萩町吉田丁  
堀壽子 全 河添  
山下マス 山田村山田  
石井壽萬 萩町土原  
上田ツル 全 御許町  
阿武春枝 全 濱崎  
中原俊子 全 橋本  
後藤アサ 全 今古萩  
山中照子 全 橋本  
河村千代 全 西田町  
藤井良子 全 米屋丁  
(第二學年一の組)  
三島コウ 三見村  
小林トキ 本校寄宿舎(奈古村)  
後藤フミ 萩町御許町  
伊藤雪江 本校寄宿舎(大井村)  
伊藤ヨシ 椿郷東分村中小畑

村上政子 萩町土原  
 松尾壽 椿郷東分村新道  
 藤貫ツル 本校寄宿舎(生雲村)  
 椋木アサ 萩町熊谷丁寄泊(大津郡三隅村)  
 河井サチ 全川島  
 福原英子 本校寄宿舎(篠生村)  
 岸靜江 椿村金谷  
 石川ハル子 全沖原  
 松本八重子 萩町江向  
 近藤良子 本校寄宿舎(宇田郷村)  
 倉増太代 全(高俣村)  
 岸森京 萩町江向  
 金子喜代子 全川島  
 河村信子 椿郷東分村中津江  
 田中キヨ子 椿村雜式丁  
 厚東フミ 椿郷東分村前小畑  
 武林チヨ子 萩町平安古  
 松本靜子 全東田町  
 中野幸子 本校寄宿舎(地福村)  
 田中靜子 椿村金谷  
 中原則子 本校寄宿舎(福川村)

松本喜久子 椿郷東分村前小畑  
 久保アヤ子 萩町江向  
 木村靜枝 本校寄宿舎(島根縣益田)  
 小島まづ子 椿郷東分村中ノ倉  
 土田ヨロ 本校寄宿舎(島根縣益田)  
 松浦ウメ 萩町橋本  
 松浦千代子 本校寄宿舎(大津郡三隅村)  
 桂竹子 萩町土原  
 神野サキ 全江向  
 渡邊ヨシ 椿村濁淵  
 多田峯子 椿郷東分村新道  
 草刈政子 萩町河添  
 乃美ハツエ 全江向  
 黒瀬美智子 山田村奥玉江  
 増山ウメ子 萩町米屋丁  
 増山靜子 全橋本  
 宮原百重 (第二學年一の組)  
 茂住タミ 萩町川島(美禰郡赤郷村)  
 中村キク 萩町平安古  
 倉富イチ 三見村  
 萩町江向(都濃郡鹿野村)

富士見フサ子 萩町西田町(萩町平安古)  
 伊藤芳子 本校寄宿舎(大井村)  
 河村千代子 三見村  
 小河キク 本校寄宿舎(小川村)  
 伊藤トミ子 椿郷東分村中ノ倉  
 伊藤睦子 本校寄宿舎(大井村)  
 長井トシ 萩町土原(川上村)  
 帥井あい 全熊谷丁  
 厚東ヨシ 山田村奥玉江  
 竹内好子 萩町古萩  
 池田京子 全熊谷丁  
 藤本芳江 全御許町  
 武田アヤ 山田村奥玉江  
 田上ヨシ子 椿郷東分村沼田ケ原  
 並川サヨ子 萩町河添  
 中島ヨシ子 全土原  
 中谷ツル 全熊谷丁  
 中原キク 椿郷東分村沼田ケ原  
 宮川ツル 萩町濱崎  
 田中キク子 椿郷東分村香川津

齋藤ミツ 萩町南古萩  
 藤井三枝 全江向  
 柴田さく 全  
 長屋チヨ子 本校寄宿舎(山田村木間)  
 齋藤キヨ子 萩町土原寄泊(生雲村)  
 渡邊嘉子 全古萩  
 杉村サヨ 山田村奥玉江  
 吉田貞子 椿郷東分村新道  
 齋藤雪枝 萩町吉田丁  
 臺田庚子 椿郷東分村前小畑  
 山根幾子 本校寄宿舎(椿村橋町)  
 白井チカカ 椿村金谷  
 末岡ハル子 山田村倉江寄泊(美禰郡於福村)  
 吉屋ハル 萩町油屋丁  
 溝部ハナ子 椿郷東分村上市  
 小野サキ 椿村青海  
 瀧口澄江 本校寄宿舎(明木村)  
 田坂ミツ 椿村河内  
 藤田ハツセ 全青海  
 新庄貞子 萩町今古萩

(第一學年)の組

栗田鹿子 萩平安古(吉部村)  
 岩竹綾 全熊谷丁寄泊(紫福村)  
 山田マサ子 山田村川屋敷  
 竹重ツチ 本校寄宿舎(吉部村)  
 堀永ツタ 三見村  
 富田シゲコ 萩町土原  
 品川マツコ 全 御許町寄泊(福賀村)  
 田中静子 椿村椿  
 金子徳 本校寄宿舎(宇田郷村)  
 桂静 萩町川島  
 今田ナチコ 全 下五間町  
 服部サトセ 本校寄宿舎(紫福村)  
 三浦末子 萩町江向  
 森屋露子 全 米屋丁  
 中村貞子 椿郷東分村清水口  
 岡朝子 萩町濱崎  
 藤田フサコ 椿村青海  
 波多野ナツチ 萩町西田町  
 河野ツチ 本校寄宿舎(奈古村)

早川昭子 萩町平安古  
 堀上ヨシ 全 江向  
 岡本朝子 全 米屋丁  
 吉崎綾子 本校寄宿舎(熊毛郡室津村)  
 西郷ヨシコ 椿郷東分村舟津  
 松尾治子 萩町江向  
 藤田貞子 椿郷東分村舟津寄留(福川村)  
 杉山艶 萩町土原  
 齋藤千代子 本校寄宿舎(大井村)  
 藤田シゲ 椿村櫻江  
 黒瀬操 全 金谷  
 來多島 八重子 萩町平安古  
 伊藤美都子 全 戎丁  
 村上スエ 萩町土原  
 大島梅尾 全 濱崎  
 杉山愛子 全 八百屋丁  
 音吉ノブコ 全 濱崎  
 石川梅尾 椿村中原  
 長嶺フエ 萩町東濱崎  
 田坂文 全 江向

田村トミ 萩町河添  
 藤川キヨ子 全 西田町  
 伊藤ハナ子 全 江向  
 中山壽子 全 今古萩  
 岡ヒデ子 全 濱崎  
 (第一學年)の組

三好シゲ 萩濱崎  
 岩田フミエ 本校寄宿舎(篠生村)  
 小野静子 全 (奈古村)  
 藤田キヌ子 全 (福川村)  
 原田セツ 山田村川屋敷  
 藤田良子 椿村青海  
 羽鳥志津 椿郷東分村松本船津  
 鮎川チヨ 椿村笠屋  
 平田スミ 全 青海  
 大石サト 本校寄宿舎(佐々並村)  
 高洲美代 椿村金谷  
 内藤ツルコ 萩町江向  
 山中松子 全 平安古(萩町西田町)  
 有吉トミコ 全 西田町

關屋千代 萩町瓦町  
 林ヒサコ 椿郷東分村裏小畑  
 林文 萩町河添  
 末成清子 全 平安古  
 後藤通子 椿郷東分村上市  
 小田エイ 本校寄宿舎(奈古村)  
 村上ウメ 萩町東田町  
 大庭ヨシコ 全 瓦町  
 陶村園子 全 平安古  
 松本ヨシコ 全 東田町  
 保富シゲノ 全古魚棚町(徳島市大字寺町)  
 池田トミ 椿郷東分村  
 吉賀菊江 萩町濱崎  
 吉屋貞子 全 八百屋丁  
 吉村糸妣 椿郷東分村中ノ倉  
 吉賀フサ 萩町濱崎  
 田總イセコ 全 平安古  
 杉登志恵 全 吉田丁  
 岡ツチヨ 全 吳服町(福川村)  
 山内ヒサ 全 土原

小島芳子 椿郷東分村鶴江  
 小河シカ 本校寄宿舎(小川村)  
 河座上シカ 全 紫福村  
 渡邊幸代 萩町平安古  
 白石壽子 全 東田町  
 屬 智世子 全 江向  
 荒瀬鈴子 全 西田町  
 末武愛子 本校寄宿舎(椿郷東分村越ヶ濱)  
 阿座上敏子 萩町江向  
 原 千代 全 今古萩  
 校外會員 (年諭順・現住所)  
 (第一回卒業生)  
 松野ニキ 萩町土原  
 伊藤コウ 全  
 金田トキ(入嫁)天津郡瀬戸崎村  
 倉田チヨ 山口町上金古曾町森重部屋水木千代子方  
 津田エン 萩町東田町  
 竹内ミツ 全 惠美須丁  
 高垣清子 全 古萩  
 小澤歌子 椿村沖原

田邊ハル 徳佐村小學校  
 金子ハツ 大井村  
 藤田サト 奈古小學校  
 藤井キク 徳佐村  
 平田トシヨ 萩町熊谷丁  
 金子桃代 椿郷東分村香川津  
 (第一回補習科終了生)  
 松本早知 萩町東田町  
 宮本カツ 全 南片河  
 山本政子 明木村小學校  
 山本幸 萩町濱崎新丁  
 中島スエ 宇田郷村小學校  
 齋藤ミドリ 福川村小學校  
 久保田ミサコ 椿郷東分村香川津  
 永井ミツ(入嫁)東京市外大久保町西大久保一九三  
 佐々木フミコ 六島村大島小學校  
 野上サダ 萩町土原  
 倉田静子 全 西田町  
 金子タマヨ 福川村  
 河上チヨ 萩町橋本

大岩<sup>事</sup> 原マサ(入嫁)支那山東省李村軍政署内  
 松村シナ 萩町江向  
 大崎レノ 紫福村(京佛岡勇蔵内)  
 國司シズエ 椿村青海  
 上田トミ 東京荏原郡池上四七西村方  
 中村喜與子 萩町東田町  
 上田信子 明木村  
 神代君子 萩町河添  
 大賀チヨ 全 塩屋丁  
 島田壽美 椿村雛式丁  
 上田政子 全 沖原  
 小野恭 奈古村  
 中原千代 萩町橋本  
 今地イシ 川上村  
 倉重マサコ 椿郷東分村新道  
 伊藤於松 大井村  
 宮本ヲカ 萩町西田町  
 河野幸 萩町江向村上ミチ方  
 山下カメ(入嫁)椿郷東分村松本田邊二郎内

河村タミ子 萩町熊谷丁  
 澄田ハツ 不明  
 神村ヨシ(入嫁)朝鮮京城南山町高橋内  
 阿部スマ 萩町北片河  
 岡部シゲヨ 須佐村小學校  
 三好貞子 萩町西田町  
 末成豊子 全 平安古  
 (第二回補習科終了生・年諭順)  
 阿部ミサ 萩町今古萩  
 多田マツ 椿郷東分村新道  
 草刈フヲ 萩町河添  
 三宅節 美福郡大嶺村  
 原チヨ 萩町土原  
 難波ハツヨ 全 米屋丁  
 森重アキ 大井村  
 伊藤霜 萩町堀内  
 堀千代 全 江向  
 長見キシコ 萩町鹽屋丁  
 桂<sup>中原事</sup> 東京府下淀橋町柏木五〇  
 安達ハナ 椿郷東分村上野

藤本ミヨコ 萩町御許町  
 原キク 全 平安古  
 松村きく 全 江向  
 岡タカ 福川村  
 三宅美智子 萩町江向  
 山根英子 全 河添  
 大中アイ 熊毛郡淺江村  
 (第三回卒業生・年齢順)  
 粟屋雪 萩町江向  
 阿部タケコ 彌富村  
 藤村マツ 川上村  
 松野花子 萩町土原  
 三浦チセ 全 濱崎新丁  
 河北由子 全 平安古  
 河野ミツコ 全 今古萩  
 山下シナ 山田村  
 村上ミチ 萩町東田町  
 大森チヨ 全 濱崎  
 三上チエ子 山田村  
 西山ヨシ 萩町川島

國弘トメ 萩町川島  
 林清子 全 平安古  
 君谷喜與子 吉部村  
 田中ツルヨ 全  
 田村操 椿郷沖原  
 田中フミコ 椿郷東分村香川津  
 秋枝アヤコ 福賀村  
 長井フミ 川上村  
 山本サチコ 椿村大谷  
 山中幸子 萩町橋本  
 伊藤フサ 椿村大谷  
 齋藤キク 全  
 阿武カノ 椿郷東分村中津江  
 黒瀬キヨコ 萩町江向  
 山下サト 椿郷東分村前小畑  
 三村クサリ 椿村沖原  
 中原トヲ 萩町土原  
 吉賀トシ 全 濱崎  
 重枝フキ 全 橋本  
 中村スミ 布哇ホノルル

松原ツル(入嫁)島根縣鹿足郡津和野本町二丁目大谷  
 大田ヨシ(入嫁)萩町渡り口木村方  
 馬屋原孝子 神戸市兵庫大井通附屬七十六ノ一  
 村田テツ 萩町江向  
 三好嘉子 東京小石川區目白<sup>私</sup>立日本女子大學  
 長嶺芳子 徳佐村  
 岩竹ハナエ(入嫁)小川村小河久吉方  
 三浦ヨシ 萩町江向  
 金子トミ 萩町濱崎  
<sup>阿座上事</sup>岩崎サマコ(入嫁)萩町江向  
 長谷千代 萩町津守丁  
 石井千代子 全 東田町  
 古橋喜代 全 川島  
 野村フミ 全 米屋丁  
 堀永フクコ 東京麹町區九段<sup>私</sup>立和洋裁縫女學校  
 松岡シズコ 椿郷東分村中小畑  
 伊藤ミヤオ 萩町江向  
 寺田クリ 椿郷東分村前小畑  
 松屋チヨ 萩町濱崎  
 岡村シゲコ 全 平安古  
 阿部チヨ 同 平安古

三村キク 椿郷東分村上野  
 溝部ハル 全 松本上市  
 小野フミコ 東京麹町區九段<sup>私</sup>立和洋裁縫女學校  
<sup>大賀事</sup>藤井 萩(入嫁)京都市外百萬遍通、西門前卅番地  
 竹重春 萩町江向  
 宮原ヒサ 全 平安古  
 堀江ミドリ 全 江向  
 光田コト 全 熊谷丁  
 村田須恵 全 江向  
 渡邊保子 東京府豊多摩郡大久保西大久保四六九粟屋方  
 遠藤トキ 萩町古萩  
 河村豊子 全 橋本  
 和田秀子 山口町下立小路日高方  
 (退會者 (創立以來))  
<sup>田坂事</sup>藤井イト 入嫁  
 杵築サヨ 入嫁  
 岡原ツチコ  
 入山フキ  
 山根トシコ 死亡  
 三浦初子 入嫁





